88
515

長庚舍歌文集

貳篇

88-315

長庚舎歌文集二編正誤

頁	行	誤	正
一六	九	そ矢を	そ尖な
二一	七	里にわ	里わに
七八	八	知添	知ら
七九	一二	綱	綱
八二	三	つ、	つ、
八三	九	はは	ば
八五	三	をみ、	をみ
九五	九	月賞	賞月
九八	一	ゆか	ゆる

頁	行	誤	正
九九	七	、たに	たに、
一〇六	五	小床に	小床の
一〇九	一〇	にとや	ことや
一一四	五	砂	妙
同	八	松陰	松陰
一一五	二	同	同
一二八	八	つい重	破子
一二九	九	方は	方に

明治三十七年四月四日昔田邊の藩ゑらし丶安藤直裕の君の二十年の祭に齋主たりし鳥山啓か像

長庚舍歌文集初編を摺卷に物せしをり撰り泄らせるを始めその後物のすみより見出てしものあるは友とちのうつしもたりしあるは教子共の記しおけるさては何の集くれのしふなとに撰りいれられたるをぬきいて丶またかく一とちの册子とはなしつ

明治四十三年一月はかり　鳥山啓

歌部

鳥山啓　作

社頭新年

とし越にて雪そさかりのうめのみや忌垣の花はふ丶みたに濟

新年宴

梅はまた匂はぬとしのはしめにもかすみを酌みて春こ丶ち明り

七十三になりける年のはしめに

老のなみ七瀬をすきてみなれ棹さしかへさはやわかのうらわに

立春

ちはやふる荒ふる風もなこみつ丶春にまつろふそらのいろかな

下津瀬にさ丶かき結へり田遊川しらうをのほるはるやきぬらん

我か故郷なる田遊川にては立春の頃より春分の頃まて川中に

垣結ひわたして白魚を取るなり

初春川

水脈とめて今かのほらんあゆの風わたる川瀬のみつぬるむなり

43 1 12
内交

初春鶯　梅か香のしるへまたしき春かせにたれ誘ひけんたにのうくひす

初春松　霞ひくはるの野つかさ雪消にて子の日をまつのいろそときめく

早春雪　うめかをる軒のあさ日にかつ消えて降る雪さへも春めきにけり

梅遠薫　山かすむ川かみとほく花見にて八十瀬のすゑもうめか香そする

待鶯　青柳のしら露きよしうくひすのたまをふゝめるひとこゑもかな

春しりて雪のたま水おとつれぬ我かまつの戸をうくひすも訪へ

この歌は初編に出しつるを讀み改みつれはさらに

谷鶯　大かたのうき世の春をそかひにて夏のはなまつたにのうくひす

雪中鶯　春かけてみ雪ふる野の梅はやしかをらぬはなにうくひすの啼く

朝鶯　花しらむうね野の霞分け來れは此の夜明けぬとうくひすも啼く

柳似煙　うはき袤る春野のやなきうち垂れてのほるけふりは煙なりけり

柳風　夕しめりあそふ糸たになひかぬをやなきにやとる野邊のはる風

遠山殘雪　雪消えてわかくさ青き春の野の野すゑにしろしをちのやまのは

野霞　富士のねのふゝきの末もぬるみつゝ裾野をうつむ春かすみかな

海上霞　雲雀鳴く野のへの芝生風ぬるみ空にあみはるはるかすみかな

山霞　みしめ吹く風はなこみて伊勢の海のいはほにかゝる春かすみ哉

糸遊　車越すうすひのやまのはなくもり岩木のけぶりかすみ添ふらん

くはまゆはまたかけそめぬ妹か屋の袖かきつたふ春のいとゆふ

若艸　佐保姫のたよりをたれにつたふらん千本の杭にかゝるいとゆふ

一すちの道をのこしてあをみけりゆきゝの岡のはるのわかくさ

雨中若艸　針はかり野へのわか艸もにけり今いとゆふも繰りや掛けまし

雨後若艸　もえにけり今日もはれせぬ雨にけし昨日の野火のあとの若くさ

春月　昨日今日かく崩ゆへしとおもひきや雨より前の野邊のわかくさ

花のうへにほへる影もそら目かとおほめくはかりかすむ月哉

うち霞む園生のはなにかけ更けてひるよりうすしはるの夜の月

朝春雨　つはめたつ妻屋の軒端かせ見えてやなきになひく春のあさあめ

夕春雨　ふかくさの野のへのかすみ色くれて墨染さくらあめそゝくなり

曉歸鴈　ささらきのあかつき月夜霞めたゝ鴈のわかれ路見れはかなしも

田家燕　垣内田のくろの桑摘む妹か家のゝきのつはめもこをやゝしなふ

雉子　ほろ〳〵と花のつゆもやこほるらん朝野のきしのきぬ〳〵の聲

陣營花　我か守るあらきの軒に咲く花も風てふあたの有る世なりけり

花下送日　散る迄もなかめてんとの設あれは花は見捨てしいく日降るとも

ころしもあれ月さへにほふ花やまによるもこもりて七日見し哉

折花　折りかへる夕やまさくらともし火の花に照らして夜さへや見ん

明治四十一年四月八日より九日へかけて雪の降りけれは、八日は陰暦の閏二月十八日にあたれり

月にほふ花のこすゑにしら雪のかゝるけしきをまたや見るべき

春の日のさすかに雪はとく消ねてうもれし花ははなにかへりぬ

はる風にくゆる花の香露ならは吹かるゝそてやひちとほらまし

とめて來るこてふにしるし花の香を野へまて風の誘ふなりけり

花薫風

花のころよめる歌とも

花くもりうしろめたしや雨よりもまつふりはへてさくら狩せん

橋はまたわたらぬ間にもさくら咲くむかひの島に行くこゝろ哉

山路ゆくたもとにかをる春かせのこゑ來し峰にはなそかすめる

小金井の花見に物しけるをり

流れ來し光はきゑてみなかみのはなにせかるゝゆふつく日かな

雨中落花　春風はしめり果てたる小雨にもしつくをおもみ散るさくらかな

四月はかり某かなり所にて

雲雀

池みつにさし入る潮のあと見えて岸にかたよるはなのしらなみ

菫

花くもり春日かすめるうす雲にすきかけ見にてひはり鳴くなり

杜若

月やとる ひはりの床にわれも寢て芝生のすみれ夜さへや見ん

山吹

やつはしの花見るやかてから衣きつゝとかけし人をしそおもふ

松上藤

かはつなく井手のかすみは雨なれや露おもりゆくやまふきの花

春曙

玉川の井手のやまふきはなふかしみつかふ駒のかけ見にぬまて

春風

中つ枝にしつゐに見つるふちの花ことしは咲けり松のほつ枝に

春山

うくひすは驚さてもつきはなの此のあかつきを寐てやすくさん

暮春月

春の日もかさきる空のはなくもり氣ぬるき風そあめちかけなる

眞床おほふ神代のふすまおもほにてかすみ高しるいはくらの山

うまいせし姿おほゆるはる山に着するふすまはかすみなりけり

散る花はかけもとゝめぬさくら戸に今いく夜とか月のかすめる

飽かて散る花のたもとに濡れにけりをしむか月も春のわかれを

新樹

ひなすゝめおやよふ聲もおくまりて青葉にくゝむ片ひさしかな

新樹風

うねひ山檀の木の葉をうらわかみ吹けとも風はさやかさりけり

庭卯花

集めつるほたるとともにまと照らす雪こそにはの卯つ木なりけれ

岡卯花

しろ妙に岡邊をうつむ卯のはなはおかみも知らぬみ雪なりけり

物へ行く道にて

早苗

波の穂もあからむはかりかりしほの浦わの麥生ゆふ日さすなり

待時鳥

苗はこふその舟ちゝめ島つ田の今日のさひらき見てかへり來ん

朝郭公

ほとゝきす鳴く一聲にあけもせいうれしさいかにしのゝめの空

蓮

露しらむ卯の花かきの朝つく夜やまほとゝきす鳴きて立つ見ゆ

水鷄

池水にひゝく上野のかねのおとにねふりおとろくはなはちす哉

法の師はかけたに見にす月のさす門をたゝくはくひなるらん

螢

河骨のみつ葉はつきにつやめきて夜聲すゝしくくひな鳴くなり

川螢

水くらき夜さへ見ゆるかはほねの花のひかりはほたるなりけり

湖螢

夜ひかる黄金のすなはたにかはの風にゆくるゝほたるなりけり

螢火入簾

石やまのつきのけしきにおとらめや八つのなかめに泄れし螢も

五月雨

あふみの海やまきりとほしひく水につれてほたるも都へや行く

夕立

藥玉の花にやとれるなつむしはをすのあみ目をいつくゝり來し

山夕立

五月雨のかくふり〳〵のはて〳〵は夕たつ雨にならんとすらん

川夕立

望にけしふしのみゆきや水無月の空にゆふたつあめと降るらん

海邊夕立

ゆふたちは庭のうゑ木にそゝくなり筒井の清水汲むとせし間に

雲さそふあらしや神のいふきやまゆふたちすなり氷雨ましりに

里川やみつかふ駒の脊を分けてかた瀬にそゝくゆふたちのあめ

百里にひとさとたらぬ濱つたひゆふたちすきぬかみつさのうみ

短夜月

やかてそのひかりを畫のひかりにていとゝ端きるみしか夜の月

夏月似霜

月しろきそのゝなつ菊綿着せんあきよりさきにしもそおくめる

氷むろ山なつさへ寒き木の間よりはたれのしもは月やおくらん

夏月照蓮

影やどすはちすを花のうてなにて西へなゆきそなつの夜のつき

撫子

萱野姫いかに悲しとひたすらん此のなてしこの見るにゑましき

夏の野に咲けるなてしこ日を痛み乳戀ふか如くつゆやまつらん

蚊遣火

しつか家のゝきはにふとくたち〳〵て蚊はしら崩すゆふ烟かな

氷室

十重はたへこほりをかこむ旗すゝき夏てふ仇をふせくなりけり

蟬

ゆふ日さすやま路の雨のつゆの間に濡れてほすらんせみの羽衣

松かけのいはか根とよむ瀧なみをこすゑになかす蟬のこゑかな

村蟬

もみち待つはゝその森にすたきても秋まて堪へん蟬の命か

誰かためにかくなき澤の森の露しけきやせみのなみたなるらん

鵜川

下津瀬は月にしらみて川しまのそとものやみに鵜ふねさすなり
きのふこそわかゆつりしか玉島の夏の夜かはに鵜ふねさすなり

納涼

夏かはのみつにそゝきて笛とれは秋と吹きたつなみのゆふかせ

舟中納涼

水よりも清きかは瀬のゆふがせを袖になかしてみさをさゝまし

樹蔭納涼

夏の日のいらるゝ濱へこき出てゝ風にともなふふな路すゝしも
夏の日の暑さも知らぬこのもとに植ゑおきし親のかけ仰くなり
風清き庭のこかけにつるあみはなつに泄れたる眞とこなりけり
松ほとは堀りもほらすも吹く風のすゝしきかけに命伸へまし

扇

かけきよみ立ち寄る袖の汗はひて濡れこそかはれ松のしたつゆ
端居してかせ待ちとれる夕くれは蚊を追ふのみにとるあふき哉

苦熱

堪へかぬる暑さもうへな昨日より今日また高し管のみつかね

夏魚

はなくはしはなさくら鯛とき過きて卯月のかつを繼のよろしも

夏獣

花うはらみつかけしつく夏かはにはりある魚も巣をやくふらん
水清きやなきかもとにゆふかけの駒乘り入れてさゝれ踏ません

夏田

夏山の眞木のしつにに角かけてねふるあをしゝゆめやすゝしき
青淵のうつまくみつをせき入れて小田の稲葉そふかみとりなる

夏萩

その身さへすゝしかるらん御萩川清きなかれにうかふかたしろ

初秋雨

桐の葉の濡れてかつ散る村さめに秋のなみたもこほれそめてき

野草花

ひと夜寐しすみれをいろのゆかりにて萩にやとかる手枕の小野

行路萩

花わくる野路の眞萩のゆきすりにむしたれきぬや村濃なるらん

朝顔

をさなこやつみて吹くらん御軍の笛にも似たるあさかほのはな

狹

今宵たれ鉢の朝かほせにかへてふかきにほひを明日か見るらん
風吹けはあなかま狹のそよくかな掛けしひさこも捨てし住家に

閑庭露

夕にはの苔路に置くを見てそ知る玉のうてなもつゆのあたもの

萩露似玉　おく露も眞萩のいろにうつろひてこやむらさきの石のはなふさ

野亭虫　萩すゝきおのつからなる八重垣に虫の音めくる野邊のふせいほ

霧　うなかふす薄にかゝる朝あめの狹きりや神のなけきなるらん

河霞　名とりかは水のうきゝり今朝深しつゝみの松をうもれ木にして

初雁　犀川やかゝるさきりのあさけにそおもはぬ旅のかけは見ねけん

雲間鴈　あしの穂の雪もまた見ぬまさこ路に跡つけそめつ天つ鴈かね

鶉　なには津に今朝たとり來し初雁はまた書き馴れぬ芦手なるらん

曉鹿　うきくもにつらなる鴈やうちくもり鳥のこ紙にかけるたまつさ

秋夕　野邊とほき軒のあき風小夜更けて鳥籠のうつらつきに鳴くなり

夜擣衣　おきてゆく鹿の音かなし月かけも露にわかるゝ小野のくさふし

捨られし憂きみの虫の父たにも音に泣きぬへき秋のゆふくれ

小夜きぬたまた更けなくに音絶ねぬ契りしひとや門をうつらん

砧聲菌　ほのかにも今そきこゆるうちやめし里よりをちの里の夜きぬた

名所砧　三輪山やすき立つ門の小夜きぬたこゑや闇路のしるしなるらん

川月　松の火のむかしおほねてなめり川なかれ行くせに照る月夜かな

社頭月　秋の夜のつきさへあかき神かきに手向けんぬさはてる妙そよき

雨後月　晴れて猶つゆちるはかり見ゆるかな雨にあらひし秋の夜のつき

月毎秋友　親まぬ年こそ無けれあきのつきにしにひかしにすみかはる身も

月前眺望　雁かねはすそ野に落ちてむかつをの月をよこきるくもの一つら

照る月のかけもしらすの濱つたひ夜ひくふねのつなてかなしも

和歌の浦に物して讀める歌ともの中に

吹きすさふ笛のしらへに白雲のそてひるかへせつきのあきかせ

藻しほ燒く芦屋の軒はくもれともけふらぬ空にすめるつきかな

夕潮をよき來し田鶴のたちとまてさす影あまるつきのしらなみ

十六夜月　待たるゝを我か光とやおもふらん暮るゝすなはち出てぬ月かな

九月十三夜　愛てらるゝ後のこよひの月人も宇多のみかとの御かけとや知る

夕秋風　夕つく日入野のをはな色くれてやみにおきふすあきかせのこゑ

海邊菊　焼く鹽もいろはつかしきしら菊のはなよ芦火にすゝけさらなん

吹きあくるなみの花さへ八重咲きて菊の香ならぬ濱かせも無し

ふきあけの濱のまさこ路汐落ちて波にわかるゝしらきくのはな

魚の香をいとはしとのみおもひつる蜑かいそ屋の菊咲きにけり

草野萠か家の團居に園に植ゑたりける菊の名を分ちてよめる歌ともの中に夕虹と琴の絲といふを

ゆふ日さす菊のはなその雨晴れてひかりあらそふ虹のいろかな

糸かけぬ琴とりなてしから人もこゝろ引くへきはなのいろかな

秋鳥　くれなゐのその鳥さかと咲く花をかけやしたしむ友かきにして

殘菊　猶ふかきはなの色香にふゆそとは汲みも知られぬ菊のした水

山時雨　立田山濡れしもみちに月見ゐてかうちへこゆる小夜しくれかな

落葉隨風　川かせのさそふまに〳〵水も無き空になかるゝ木〻のもみち葉

川落葉　もみちゝるひの川かみのこからしに血汐となりぬ水のしら波

紅葉殘枝　雨とほき冬のやまかは淵あせてそらにうつまくかせのもみち葉

殘鴈　となみ張る野中の松のしたもみち風に泄れたるゐたも見ゐけり

霜夜鐘　雁の來る花とかくてふかまつかの冬かれてこそ文字は見ゐけれ

冬月　船まとにひゝくもさひし月落ちておく霜さむき山てらのかね

岩むらにたち氷かゝよふ冬の夜の月のみいつそあやにかしこき

小夜あらし雪ふきおとすやまゝつの枝にあやふくすかる月かな

しゝむらに昨ひ入るはかり冴ゆるかな眞神なく野の冬の夜の月

雪ふれは人とる峰のまかみすらかしこむはかり冴ゆるつきかな

都雪　靴のはなかくるゝ今朝のはつ雪に大路をのほるみやひとやたれ

夜雪　掻きくらす雲にうもるゝ月かけを庭にうつしてつもるゆきかな

水鳥　川かせも身を切るはかり月冴えてをしのつるき羽霜そきらめく

水鳥驚筏　ふくみ來て小川にひたす樫の實のひとりははまし雌雄のをし鳥

鳴獵　ゆくり無くたつや芦間の水鳥にくたすいかたし汝やおとろく

兎獵　いかたしのこほりを碎くみなれ棹馴れても鳴のゆめやおとろく

千鳥　あられ降るあし原かくれ鳴そ居るいさゝは玉をたはしらせてん

網代　ありあけの月の色さへしろうさき見なうしなひそ雪のあさかり

爐火暖　どくさはら朝狩すともありあけの月のうさきにそ矢をはなちそ

あまの子か宿をかり寐の床の浦に月の夜すからちとり聞かはや

あふみ海いりを遁れてひをも經すかゝるすく世やうちの網代木

いは木たく室あたゝかし屋のうへに出つるけふりも春と霞みて

冬人事　かりかねの寒き朝かせ身にしめてちまたの霜やふみおくるらん

行路歳暮　道の邊の並木に來居る鳥も無しゆきかひしけきとしのこすゑは

月　ひかりこそしたゝるはかり見ゆれとも月はみつ無き境とそ聞く

旱　くるま井のみつさへかれて照らす日にわれも轍の鮒となりなん

雨　おかみ住む谷のいはむら虹たちてうつまく淵にあめさわくなり

朝雲　さし出てん朝日のいろをまつ見せてつまくれなゐの峰のしら雲

嶺上雲　夕くれの雨となりにしすゑなれや猶うちしめるみねのあさくも

たつ虹はをろち覺えて晴れやらぬあま雲くらし鳥かみのみね

誰か中の涙のあめかまつやまのすゑこすくものそてしほるなり

曉光浮海　波の色もむらさき立ちて海こしのみねのよこくも影うかふなり

あから引く空のうなはらまつあけて閣にはなるゝ沖つしらなみ

漁火　ひるまには木の葉と見えし蜑舟にもみち焦るゝおきのいさり火

空のうみの雲のなみ吹く潮風にまた〳〵くほしやおきのいさり火

煙

わたのはら風にむかひて行く雲は湯の氣の船のけふりなりけり

漁村煙

鯨煮てあふら取るらし空の海もけふりにこるくしもとのうら

蜑か屋もかまとのけふりにきはひて海さちおほし波た〳〵ぬ世は

川

立ちならふわら屋の上に橋見えてさとよりたかき川もありけり

田家夕

うち解けてぬらくよしの〳〵川にこそ靜けき夢のふちはありけれ

名所橋

しつの男か牛ひきかへるゆふくれにほの見ねそめつ星のから鋤

山家鳥

我さへにこするをつたふこ〳〵ちして渡るもあやふ甲斐の猿はし

草庵雨

くら谷の雲のおくかにぬえこ鳥うら鳴くこゑをたれに聞かせん

松影映水

草のいほの雨夜のゆめにか〳〵る哉ありしとはりの花のにしきも

新邸松

まつのつゆいく春秋かつもり來て千代のかけ見る淵となりけん

殿作いませしにはのまつか枝に田鶴もより來てにひ巣しめなん

竹

たまもの〳〵花にまされるふし見せて臺のたけや折りかさしけん

窓竹

さ〳〵て寐し窓にや月のさしつらん夜床にやとるくれたけのかけ

山椿

あはれ誰か世にかくれ家そともし火の光をつ〳〵む窓のくれたけ

澗底猿

風絶ねしかたやまつはき花落ちぬ鳥さすひとのさをや觸れけん

鯨

春深き巨勢のやま風吹かぬ日はあれともつはき散らぬ日はなし

鶴立洲

風のほるみねの木むらをつたふなりふかき谷間に猿の鳴く音も

鵰

くま野人あけのそほ舟まかちぬきゆくての島はくちらなりけり

鳩

芦わかのうらのはなれ洲しほ落ちて波のたちとに鶴そおりゐる

鷄

釣たる〳〵ひともなきさの捨小舟しめてかもめのうをやうかゝふ

鷹

ゆくりなく伏木を出てしやまはとや八幡の神のつかひなりけん

板はしの霜踏むたれか聞きつらんわらやの月にかけの鳴く音を

親をはむ鳥たにあるを飢ゑてしも稻穗をつまぬこ〳〵ろたかしも

くたら人数へさりせはいさを有る鳥と知られてくちやはてまし

飛鳥過山　聲たてゝさわたる雲とあやしまんひね鳥こにのやまと知らすは

詠史　むろ町のいほりのやなき力無みかせこそさわけにしにひかしに

味耜高彦根命　花くはしさくらを知らてしら雪は消ねす有りとも思ひけかなる

高倉下　くら谷に落ちしたち氷のひかりより熊のいふきを君そはるけし

武内宿彌　天のはらおほふほのけは消ねはてゝくかへの御湯にすめる月哉

顯宗天皇　新室にさへつるひたきおほ鳥のひなゝらんとはおもひかけきや

和氣清麿　かみなかのよこしまこゝろくしきつるきみこそ道の鏡なりけれ

平將門　其名さへ盤井の郷のくなたふれうへもつくしのきみにかも似る

平忠盛　人まねもあはれおふけな宮ところ猨島にたてゝ我はかほなる

平知盛　解きおきし木太刀に塗れる白金は暗からぬ身のあかしなりけり

とゝめつる月のみやこにすみかねて西に落ちしや悔しかりけん

平敦盛　鳩の鳴く磯山かけをそかひにて落ちはおつへきあさつきよはや

佐々木高綱　川島のかちの木の間をくき出てゝむかひの岸に鳴くさゝきかな

伊勢貞親　ひたすらに若めを愛つる伊勢人のひかこと故にさわくなみかな

加藤清正　君をおもふ心ゆるかぬ跡見せて地震ふる城戸にまつ入りにけん

片桐且元　桒うるあきひとの子をみやこ路にまつすゝませて君にがみけん

なには津の三つのたはかり三つなからたゝてかひ無き澪標かな

明智光秀　茨木の里にわかへるほとゝきすいかに血に鳴くうらみなりけん

醉美人　天のした照らしともあへすたか村の露と消ねにし三日つきの影

さゝの葉の露のみたれを待ちつけて吹きよる風に花なをられそ

獵夫　うたけする母屋の廂にすへり出てゝ風待つおもこ醉さますこや

樵夫　かりゝ人は熊のつきの輪つらぬきぬなかるゝ星ごたまを飛はせて

ふみゝては眞柴こる身もくらゐ山のほりし跡は有りとこそ聞け

樵夫夕歸　柴人のかへり行くてのゆふけふりたくや昨日のおも荷なるらん

車夫　乘る人の膝のおほびを身にまきて引かぬくるまに賤はねふれり

聽謠曲　羽ころものうらおもしろく謠ふなりをとめの姿見るこゝちして

高さこのをのへの松とこゑあけて誰がうきゆびに千代祝ふらん

狂言のわさをきをよめる歌ども

布施無い經　彼の岸のあしにこゝろのかゝれはやいく度なみのたち歸るらん

古武者　したび來し若江の水にさす月をうらみておいのなみや寄せけん

佐渡狐　無き物を有りといひなし人はかる人こそやかてきつねなりけれ

かくすい　木かくれの月の面わをかいまみて餘所に逃け行くむこの山の端

花子　妻梨のそれとも知らであかしけん花にやとりしうかれこゝろを

腹立てす　あちき無き世を捨舟にのりの師も沈めあへぬはいかりなりけり

相合袴　ふちはかま唯一もとをあし垣のかなたこなたにねたかはすなり

牛盜人　ちゝの實をおとさしとての心とも知らてこの葉を何うらみけん

麥酒　さかつきに汲めは水沫を吹きあけぬ今もやこもる麥のあきかせ

茶　こまかなる心はへこそ知られけれうたへの庭にひきし木の芽に

美濃の國人日比野の儀三郎か茶器を作りてそれにゑらん料の歌こはれけれは

人訪はゝ霞よりまつやまふきのいろなるつゆを汲みてすゝめん

玉　御ほとけのひたひに入れし玉よりも我か八尺瓊そ神たからなる

たなはたのうなける玉やすまるてふ星と見ゆらん天のみなかに

鏡　影見ゆるかしらの雪のますかゝみひかり無き身も月日うつりて

弓　その昔取りし武夫か腰さへもゆみとまかりて世にすたれつゝ

琴　絶にぬへきあたら匠か玉の緒をゝことのいとにかけやとめけん

一絃琴　須磨の蜑の汐木のあまりそれにさへから野の例引きやかゝけん

枕　終夜取りてもいねすあけゆぐを待つやまめなるまくらなるらん

球戯　みなれ棹なれてだくみにまろはしつ机かしまのなみのしらたま

象の牙の玉にあらそふのりものは室のあそひも知らぬなりけり

拳銃　ほとはしるたふしか崎の水玉にうちこそかへせおきつしらなみ

室内射的　川やなき名に負ふ弓に引きかへて露のたま散るまとのうちかな

魚形水雷　波に浮くおほ城をくたくいかつちと成りにし魚は誰はなちけん

午砲　鐘の音もとをまりふたつあはせてんうまこそひゝけ筒のひと聲

國旗　天津日の御かたにしかすことくにの月の旗手もほしのはたても

風雨計　はるさめの明日の晴間を針に見て花見のころも縫ひやいそかん

活字板　さくら木にゑらぬかしろに植ゑかへて言葉の花や千度咲くらん

鉛筆　滴ちとりみつもなきさに跡つけてすゝりの海はあさらさりけり

此の歌よみて後十年はかりにやありけん税所篤子か御垣の下草てふ歌集を見しにいむきといふ題にて蟹の跡とゝむる水は文机の硯の海も頼まさりけりと

讀まれたる歌ありきいとよく似たる心はへなりけり我かいむきの歌はかく

風船　横はしるもしのうわらの芦蟹やいろなるみつにあとゝむらん

電車にのるとてころひけれは　きぬかさを地にくたして輕き氣をふくめる球はつきとのほれり

小車のしたにたにぬはさちなれやわたちのふなの老のいのちも

汽車にて物へ行きけるをり〳〵讀める歌とも

ともし火の花さかせけり春やまのくらき道にやくるま入るらん

天つそらめくらぬ星を窓に見てよるのくるまのゆくへをそしる

山くゝり橋わたりゆくゝるま路は谷のなかれのめくるなりけり

黒金のはしるくるまと落ちたきち下行くみつといつれはやけん

なゝくさをかそへもあへぬ露の間に秋の野遠く行くゝるまかな

群れたちしすゝめは空にとゝまりて稲葉の雲そよそになかるゝ

小車にむかふあき野の小まつはらをはなの波になかれてそ來る

千里ゆく〳〵るまの窓の月見れはやまのはにくるこゝろこそすれ

漁船にて物へゆきけるをり〳〵によめる歌とも

岩すみの煙はくもにつゝけともあめをはなれてゆくふなちかな

汐瀬ゆくふねにともなふ月見れは雲となかるゝおきつしまやま

これやこの幡磨はや鳥ときの間に明石も須磨もあとのしらなみ

伊勢の國庄野の驛にて

我か足もたきしなさすは白鳥のみはかをかみて行かましものを

上總國君津郡鹿野山へ物しけるをり木更津にて

はし船のよらぬ波路にむかへ來るくるまは潮のひけはなりけり

あるとしの冬箱根に湯あみに物して

ふゆ知らぬ湯屋の板戸をすき影のつきや高根のゆきに冴ゆらん

武藏國西多摩郡の御嶽に詣てけるをり御坂をのほる程

くら谷にくたる雨ぐもしたに見て峰のゆふ日にそてしほりつゝ

その夜神つかさの家にやとりて

風すさふ杉のしたいほまとさゝん小さめなからに雲そいり來る

安藝國高宮郡なる福王寺のさゝれ石といふを見て讀めるこれは我か木の國なる千里の濱より出てゝ在五中將の苔を刻みて歌書かれたる石なりとそ

きさみけん苔ものこらぬ筆のあとをこゝろに讀みて石を見る哉

海邊に逍遙して

歌おもふこゝろのみつにうかふとも知らてや船の汐路ゆくらん

高　富士のねに燒きしくすりは雲と成り雨となりてや空に往にけん

曲　うしなひしもとのつりはりはたりしはいかに曲れる心なりけん

輕　あし田鶴の地におち毛も松かせに吹かれてまたや雲居には飛ふ

重　もたけ得ぬかなへの足にたくへたるつかさもおもき限なりけり

緩急　雁かねはこし路にいそくおほ空のかすみにゆるしはるの朝きた

老少　うま寢せるうま子の顔をまもりつゝうち笑むおうな現とも無き

親疎　かれ〳〵にとすれは成るそあさましき連る枝のあひもなひかて

深淺　かた淵に落ちておほるな石かはのあさ瀬たつねてわたる鄙津女

黑白　山からすかしら白きに腹くろききみもさすかにひとかへしけん

前後　ゆきすきて前より見れはうしろ手に似氣無き顔の淺ましきかな

左右　春山のしるへの石のみきひたりいつれのみちにはなかたつねん

勝負　玉たれを泄れし御聲に定まりてまけしこと葉もひかりやは無き

青　何某のあかひのあるし今さらにもれるこくはを見れはをかしも

黃　とし〳〵に賜ふ黃金のひかりさへ鶯のしるしに照りや添ふらん

赤　火に燒ける石を赤猪と見し神はあたねつきてや御けし染めけん

白　ひゝらきの花もこほれてしつの男か米つく庭にあられ降るなり

黑　腹黑きすさひなりけりからす羽に墨もて書きし文を讀めとは

鏡の影に　そのかみのくろかりし世を思ふにもかゝみの影に散るなみた哉

數さへ見ゆる　秋の月わきてこよひのかけ清みかすさへ見ゆる湯けたなるらん

くさ〳〵の難題をまうけて口疾く讀み出つるを詮にて物しげる歌共の中に

地下花　はる山のつちの下行くをくるまに花をかさせる人も乘りけり

夏雪　水無月のもちの夜にふる雪も見つふしの岩屋にかりまくらして

聾者聽鵑　耳無しのやまになくらんほとゝきすさこそと夜半の心にそ聞く

盲人看楓　さくり見る庭のもみち葉つきかけはさせとも夜の錦きなりけり

仕をかへさんと思ひなりぬるころ

老いしれて世にかゝつらふ見にくさを笑ひし人と我も成りにき

つかさやめられける　折宇野東風かうら安く花を見るらん學屋に取にしむちを君

はかへしてと讀みて送られけるかへし

まなひ屋の鞭はかへして花に行くこゝろの駒そいまはいと無き

物の名

包燒　妻琴にあはせてわれは笛取らんつゝみやきみかうちすさふへき

唐桃の花　みつからも物はなすへしひとにのみ萬のことをまかすへしやは

葱草　月やどるつゆのみたれに跡見にて野路の篠吹く小夜あらしかな

一本菊　世にあはて沈みし人もとき來れはうれしき瀬にそ浮ひ出てぬる

木名十　こと無しになかき月日を送りつゝしつかに百の世をむかへ得ん

鳥名十　月かけのうつらぬ枝も無かりけりうつるはしとゝ露おきしゆゑ

虫名十　いと疾くも終の住家に歸るなり有りてふのみのこの世はかなし

十干

十干の文字數は唐文字はろなう十文字なれとよみ聲は二十四文字なれは一

首の歌によみ入れん事はいと難けれは拾遺集に十二支を二首に分ちて讀めるにならひてかくなん物しつる

槌の柄を作る木の枝は昇る日の時の外山に切れる檜の枝

さい槌の取りし彼の柄の三つの柄を彼の時置きつ三つの所に

十二支

十二支の文字の數も唐文字は十二字なれともよみ聲は二十一もしなれはそを一首によみ入れん事いとかたしされはこそ拾遺集には二首に分ちてよまれたれされと猶十文字の餘あれはそのついてのたかふをたにきらはすは一首によみ入るゝ事もかなふへしとてとかうおもひめくらしてからうしてつらねつれとおたやかならぬ所々のあるをいかにせんかゝる事物せんはやう無きわさなれとふと讀みてんと思ひなりては中空にやみなんも腹ふくるゝ業なれはあなかちに物しつるになん三の句のうまは今てふ事をしかいへる

なり六帖大和物語などに驛といふにかけて今やをうまやといへり

うしほ子つ島回去る船往ぬなうま魚取り取らん波居立つ ども

一より十までの文字こゑを讀み入れたる

朝こちの寒くし吹けはいちしろく見ねにしちゝの花は散りにき

同し事をよみ聲にて

こゝの花かしこのはなにふたかれる宿をいつしか人よ見なゝむ

なそ〳〵

晝顔　下にのみひそみし蛭ものほりけり半朽ちぬる蒲の穂の上に

紫陽花　味村は一村見にす潮さゐにのほりし潮も今し落つれは

女郎花　見よや人をしねの穂にそ實は結ふ荒れ果てし田も苗し植うれは

英照皇太皇宮かくれさせ給ひける御折

天つ日のかけもしめりて墨そめのさいてによわる門のはたかせ

皇太皇后宮の世にいまそかりし御時先帝のみけしの經緯を御手つから解きて織りかへさせ給ひ御廟の打敷などにせさせ給ひし御事を承りて

久かたの雲のころものたてぬきを解かす御袖やうちしくれけん

英照皇太后宮の百日の御祭に天皇皇后兩陛下の京都にいてまし給ふを送り奉るとて畏けれと心のうちに思ひつゝけゝる

大御衣のたもとやいとゝひちなまし月の輪山のはなのしつくに

奈良原繁か娘身まかりてはふりのをり

かそいろはいかにうれしと思はましよすか定むる門出なりせは

宗良親王の御祭に秋懷舊といふことを

もみち葉の秋のにしきのはた雲にありし月日のおもかけそ立つ

矢田部信男か遠つ祖の三百年の祭に夏懷舊といふことを

眞さかきの新かゝみ葉に有りし世の五月の影のうつらましかは

美濃の國人日比野儀三郎か母の七十の賀に

玉かしはしゝにもあらし美濃山のたかきよはひの數にくらへて

寄藤祝　ふち波のはなしふさはし老まつにあゐて千世經ん君かかさしは

社頭祝　ますかゝみかけて祈らは眞さかきの千世の榮も身にやうつらん

竹契遐年　千代かけてかへぬ操をうるはしみ竹葉のつゆにうきゆひやせん

或人の還暦の賀に

いくたひか產湯のみつのみなもとにたち歸りなん千世のとし波

或人の八十八の賀に

八十瀨こゐいま八汐路にうち寄せぬゆく末とほき千世の年なみ

旋頭歌

梅の花を人に送るとて

まひ無しに名たに告らしといひし此の花　誰か爲に我手折らめやあたら此の花

深山春月　さくら咲く深山の月の影更けにけり　今もかも花の木蔭はあらはれぬへき

今樣風

梅始開　門の柳をくろかねの絲に引きなすよしもかな　みゆきふる巢の鶯に梅さきたりと告けやらん

花下送日　さくらかもとのたひ枕いく夜か寐つる筑波山　花に明しつ夜には六夜花にくらしつ日に七日

待時鳥　花ちる里のたちはなを木傳ふ月そさやかなる　さはかり聲ををしむともかけたに見せよ郭公

苦熱　水に成るまておしこめし風を放ちて涼むへき
　たからなき身も稲妻の廻らす扇は得てしかな

浪華にありけるをり舟遊して
　なにはほり江に住む蟹のあなおもしろの舟遊
　をとめ笛吹き琴彈きてあな面しろの夕すゝみ

藤原吉野　求めし肴惜しみつるうらみそ深きくりやかは
　我か世の限りいろくつは此水口に入らぬなり

尾張滋主　天にかけらふ龍の尾の道にすくれし跡見せて
　おいの波にもしほたれぬ雲の袂そかろけなる

雜體

牟婁歌

これは我か、故郷なる木の國牟婁郡田邊の里の近きあたりに在りし故事あるは今の有る樣なとを催馬樂に做ひていひ出てたる歌ともなり今その中より五つ六つぬき出てつ

谷上　貫川にならふ
やかみのや、みやに、宮にぬさとる、ぬさとるは、熊野まうての、都人かも、二段都人かもや
いなはねの里に、駒をとゝめ、岩田の川に、垢離かいていけ、三段垢離かゝは、市の瀬のこりをかけ、清まはり、熊野の宮の、宮路通はん

鈴掛　淺水にならふ
すゝかけの、袖もしんとゝしんとゝに、山の奥の、狹霧にそほち、かしこきや、御子の命そ、丘八丘うちこゑ、谷八谷、分け給ひけんや、さきんたちや
大塔の宮の十津川へ落ち給ひし御事をよめり

瀧尻　櫻人にならふ

瀧しりの、王子のほくらに、をさめたる、ちひさ小刀、誰かたてまつるや、そよや、たれたてまつるや、そよや、みちのくを、うしはけりてふ、藤原の、あそゝ奉れる、小鈴たくへてそよや、矢の根もそへてや、そよや、

瀧尻の王子の祠に藤原秀衡の奉納せる短刀矢根小鈴あり

田邊　山城に傚ふ

田邊のや、湊こきづる、百舟は、なよや、らいしなや、さいししなや、百舟は、はれ、二段百船は、吉野のみかとの御言もち、なよや、らいしなや、さいしなや、御言もち、みことも ち、はれ、三段御言もち、脇屋のあそか、伊豫へわたらすや、らいしなや、さいしなや、伊豫へわたらす、伊豫へわたらす、百船は

脇屋義助田邊の湊より伊豫へ渡りし事太平記に見ゆ

山柿　挿櫛に傚ふ

やまかきは、枝もとを丶に、なりしかと、高尾の山のましらかとり、鴉か取り取りしかは、

山柿も無しや、さきんたちや

高尾山秋津の郷に在り此の山の麓に秋津川といふ里あり多く柿を産す

夫婦瀧　蘆垣にならふ

めをとの瀧の、瀧の岩屋に、大蛇住み、大蛇住み、たれ二段をろちすみ、たれか、たれか、その大蛇、うちきため、きためけりしも三段和泉人天敗、あましきの、武男そ、そのをろち うちきためける、四段あやしきをみな、をみなをうちしかは、その大蛇、命死にけり五段くれはとり、あやし、あやしき事を、我はきく、我は聞くかな

和泉の浪士天敗某この瀧の岩屋にて大蛇を打ちたるよしいひ傳ふ

眞白良　葛城にならふ

ましら丶の、しら丶の濱のや、清き渚に、まなこちに、二段玉しけや、白玉しけや、眞白玉しけや、をしとんと、をしとんと三段しかしては、わか大君もや御船よせ、よせなん、をしとんと、をしとんと、とし とんと

長歌

銀世界てふ梅園の花を覩て詠める長歌短歌

ひむかしの、大き海原、うなさかを、過ぎて漕き行き、舟寄せし、澳津島山、その島は、蓬か島、その山に、しみさひたてる、目かゝやく、寶の林、うらくはし、眞玉のさにた、あなめたし、めたしと見しは、綾垣の、ふはやか下に、むしふすま、なこやか下に、我か見たる、夢にしありけり、白眞弓、角筈の里、白銀の、界とふ園其の園に、今朝來て見れは、梅の花、千本八千本、園もせに、咲きこそ滿てれ、庭もせに、咲きこそをゝれ、きその夜の、夢に我か見し、神山の寶のはやし神島の、眞玉のさにた今朝こそは正目に見つれ、白金の此の界は、神の園かも

八千本の、梅をうゑなへ、白銀の、花咲く界、誰ひらきけむ

忍はすの池の蓮を見てよめる

忍はすは、神のます池、々水の、廻れる島に、御あらかの、雲高知り、島山を回れる池に、花蓮しゝにそ生ふる、春されは、しか葉茂らひ、夏來れは、しか花咲けり、紅の、色し麗し、白栲の、匂し清し、長く酡ふ、庵に杯取り、豈はも、人そ見はやす、月覩るや、橋に杖曳き、夜さへや、我は眺めん、島山に、鎮りいます、市木島、姫御神も、うるはしと、思すらんや、そ、めたしみと、見そなはすらん、忍はすの、池の蓮そ、うらくはし花姫神も、笑み榮えつゝ、見ますらん、此の花蓮、散らまく惜しも

長酡亭今は岡田亭といふ中島に在りて池にのそけり雪を詠める歌

しらぬひ、築紫の綿、百船に、積み來し綿、千船に、積み來し綿、すが〳〵し雪の、消にまく惜しも

津田出か病をとふらふ長歌短歌

朝風に、眞帆引きあけ、夕凪に、眞梶しゝぬき、八舟たけ、出て入る船の、百船の、津田の我か兄は、七十歳の齢重ねて、つゝみなく、眞幸くませは、伏庵に、訪らひ來まし、御たちに、

我も參出て、、茜さす、昼はしみらに、野干玉の、夜はすからに、古の、事ら語らひ、言の葉の、道あけつらひ、うた、ぬし、たぬしかりしを、禍津日の、神の荒ひか、草づ、み、病にこやし青山の室（出の文屋を碧山房といふ）に籠らひ、伏庵に、訪ひも來まさす、御たちに參出まし物、病む人を、ゆきとふらはゝ、病む人は、嬉しみ思ひ、いたつきを、しまし忘れて、たぬしと、思ひてあらは、中々に、病重ると、藥師そ我に告けつる、然こそは、書にも記せ、そこ思へは、訪ひも得かねて、伏庵に、我も籠らひ、杖足らす、やさかの歎、なけかひ居るよいたつきは、とくさわやきて、伏庵を、訪らひまさへ、我も參出てん

同しをり、桃の實のかたを畫きて送るとて。讀みて添へたる長歌

物さはに、意富加牟豆美、かしこきや、神の御前に、ぬさ置きて、我そこひのむ、伊邪那岐の、すめ大神の、よさしつる、御言のまにま、人草の、うき瀬におちて、くるしまく、助けたふとし、古ことに、傳へし來れは五百代の、津田のうしの、いたつきに、こやしいますを、八種の、雷神を、神やらひ、やらひし如く、病をら、拂ひ給ひて、山人の、園におふとふ、三千歳の奇しき木の實の、遠長く、榮ゆるもころ、いや榮に榮にしめとそわれはこひのむ

津田出蟹を贈らる歌そへたり

百傳ふ、つぬかの蟹、この蟹よ、はしき蟹かも、いちゝ島、三島に行かてあな嬉しあかり來にけり、誰しかも、吾許おこせし、五百代の津田のわか兄そ、言の葉の、眞玉もたせて、あかりおこせし

近藤重高か松茸を送られたるよろこひに

梓弓、いなりの山にしみたてる、松の木村に、木の子こそ、たつといへ、君かさす、衣笠山の、本滋き、山のとかけに、木の子こそ、おひたつときけ、月の入る、西の都ゆ、ひむかしの是の御里に、はしきやし、吾兄かおこせし、遠つ人、松の木の子は、稲荷ゆか、君さそひ來し、衣笠ゆ、吾兄かつれ來し、間へとも、子等は答へす、のれといへと、子らは告らす、よしゑやし、答すありとも、よしゑへし、告らすはありとも、朝よひに、かたへにすゑて、杯とれは、酒はうましえ、まりとれは、いひはうましえ、あはれ〳〵、是の木の子は、めくしう

つくし

折竹の、かたまにこめて、はろ〳〵に、此の子おこせし、吾兄や鹽槌

和歌山縣の人橋本季吉か學の事をいそしみ勤めたるをめて、縣のつかさより菅原の神の御像ゑれる白金の盃をたひけるよし聞きてよみて贈りける歌

天なる、姫菅原、すかはらの、神の命は、文の道、守りますとふ、其の神の、ちはひませかも、うち渡す、橋本の吾兄、教子を教へ導き、文の道、まねくひろむと荒玉の、年月久に、村肝の、心たゆはすいそしめる事のむかしさつとめつる事のたふとさ、人皆の、めてしはやせは、縣知る、君もむかしみ、白金の、瑞玉うき、玉うきを下したひけり、菅原の、神の命も、嬉しみと、おもほしめせか、いそしみと、見し給へこそ、大御影、あらはしつらめ、その玉うきに

加納諸平か、三十年の祭を、和歌山の岡東舘にて、物せし折、心地例ならて、得詣てさりけれは

柿園の、大人の命の、神あかり、あかりましゝゆ、荒玉の、年のみそちと、片岡の、東の舘に、教子ら、いむれ集ひて、眞榊に、木綿とりして、いはひ瓮を、机にすゑて、御靈をき、祭りか居らん、歌思ひ圓居かをらん、草つゝみ、病しあらすは、御前に、我も額突き、圓居に、我もましらん、栲衾〳〵か、ふり、さね床の、床にこいふし、庭雀、群れ居る見れは、教子ら、うすゝまり居て仕ふらん、姿おもほゆ、植竹の、さやくを聞けは、うた人の、吹き合すらん、物の音の、調しぬはゆ、我かぬしの、書かせる御歌、床の邊に、我も掲けて、こゝなから、をろかみまつる、昔偲ひて

こゝなからをろかむ我を柿園の大人はなめしとおほすらんやそ

爲牛述痛歌

いとこ、汝兄の君、春の日の、霞める時に、若艸の、萠ゆる野の邊に、すく〳〵と我か來るはしに、にけ嚙みて、臥せりし牛の、うち嘆き、我に語らく、我か力、こはくし有れは、犂を、頸木に懸けて、荒小田を、あらすきかへし、重荷らを、そひらに負ひて、しなたゆふ、山

路通はく、吾妹等か、乳をすゝろへは、嬰兒は肥えまさりけり、老人は、若返ましけり、我か伴の、もかさを輕み、其のもかさ、人に移せは、其の人の、もかさも輕く、愛しき子の、命まさきく、細し妹の、面疵つかす、活ける世に、たつる功は、かくはかり、高く眞廣し、魂きはる、命死にても、其の宍は、うましをし物、大御酒の、御肴はやし、豐御饌の御あはせはやし、うま人も、愛てゝそ召さく、やいつこも、譽めてそくらふ、我か骨を、炭に燒きなし、其の炭に、注きて疵さは、みさひ井ゆ、汲み來し水も、眞玉なす、もひとそ澄まん、甘き黍、紋りし汁も、み雪なす、砂子と凝らん、菰枕高き、賤しき、諸人の、はかせる靴も鯨取り、海かくぬかに、旅人の、持たす袋も、我か伴の、皮もて縫へり、荒熊の、膽にも劣らぬ、藥とし、我か膽も成らん、我か角も、我か蹄も、くさ〳〵の物、作るへし、かくはかり、功ある身も、飲む物は、唯清水のみ、食む物は、唯草葉のみ、なす業は、いとしも辛し、伺ふ人は、うたてもつらし、鞭とりて、鼻繩はけて、心無く、つかひ箸め、果ふは、うちも殺しつ、眞神より、人はおそろし、虎ゆけに、人はゆゝしも、我かもこに、角こそあらね、眞神なす爪とからねと、虎の如、牙こそとからね、人はゆゝしも

詠史

渡津海の、底津岩間に、蝦こそは、住むといへ、奥山の、茂木か本に、麁こそは、臥すと聞け、何しかも、大空高く、渡津海の、蝦さへ登り、奥山の麁さへ翔り、天雲を、くゝはらゝかし、天津日を、取らんとすらん、くなたふれ、醜の魚かも、いなしこめ、醜の獸か、誰しかも、蟄ちきためまし、何時しかも、狩り拂はまし、人皆のうれたみ思ふをあな嬉し、時の往けれや、木の本に、落ちつる履、岩隱、研きつる鎌、其の履は、麁の角踏み、其の鎌は、麁の足斬り、暴ひつる、麁し死ぬれは、蝦さへに、燒かゝて失せぬ、天津日は、かくてそ清き大空は、かくてそ高き、萬代に、仰け其の履、いつけ其の鎌

文部

新年川

冬の暇たひけるをり、甲斐の國なる御嶽に詣て、そのあたりに名たゝる所〻見めくりける程に、いつしか年くれて一月一日といふに、鰍澤より富士川を下らんとせしに、今日は年の始とて、例は舟出たし侍らぬを、にさらぬ事のありて物つみくたし侍れは、そのたよりに一人ふたりはのせ參らすへしと、申し侍りと、宿のあるしいふ、いと嬉しくて乘り入りぬ、流早くして、舟のゆく事矢の如し、今日年の改りし日なれは、心のなしにや、空ものとけく、目のうちつけに、此方彼方の山〻も霞みて見ゆるに、富士の高根は麓近くまて雪のふりつもりて、玉を削りなしたらんか樣なるに、年の初日の花やかにさし昇る物か、いつはあれと、今朝しもこの世に類なき景色を見るこそ嬉しけれ、今年の御歌はしめの御題は、新年川と承れは、此のけしきをよみて奉らんこそふさはしからめとて

神山に昇る初日のかけ見えて年波うつる富士川の水

といふをはしめて、十首はかりよみ出てつれと、いつれも〻〻さかしきはなし、歌は口疾く得いひ出てぬに、舟はと丶こほらて、早う岩淵の里に着きぬ

早梅

我鉢にうゑたる一木の梅をもてり、我か買ひ得てよりも、早う二十年にも餘りぬるを、其の前には、いくはくの年をか經たりけん、もとたち太く蟠れるか、三本に分れ、長は僅に三尺許なれとも、枝こまかに姿をかしく、いみしう神さひたる老木の樣して、幹にも枝にも、苔おひたり、日野の大納言はかたはつける物とおとしめたまふらめと、猶いひしらぬ趣あり、鉢も青磁の古く唐土よりわたしたるにて、徑二尺許、たけは一尺許、ものふりたる植木にはつき〻しくなん、年の始には此の鉢の木を小床にするおくを例とし、古年の程より唐室といふに入れ、南おもての簀子におきて、日の光をうけしめ、疾く花を咲かせけるか、暦改りての年の始は、大凡一月許も早けれは、唯日の光を受けしむるのみにては、しか疾く咲くへうもあらねは、西の國ふりの室作りて、黑金の筒もて火の氣を通はせ

なと、園守におほせて、とりまかなはせけるに、いつしか年も改りぬれは、園守は彼の鉢の梅を室よりとうて丶、小床にするたるに、枝毎に玉をつ丶りたるか如く、白くまとかなる莟の、大きく小きか連りて、その間には、開けたる花も所〻に雜りて、麗しき香をさへ放ちて、一間薫りみちたるは、園守か心つくしもかひありて嬉し、庭の梅はまたふくみもあへぬに、賢うも咲かせたる物かな、園守の心は佐保姫の御心なりけり

梅

林の和衡てふ人、近き頃敢島の道たとり初めて、我か夕つ丶の屋の月並の圓居に物せらる丶か、此の月の圓居の折も來て、人皆にいふやう、已からうし侍るひとつ山の梅、昨日今日咲き初めつと、山守より告けおこせ侍り、來ん日曜の日好きていけに侍らは、御覽しにおはしてんやといふに、皆喜ひて、かならすり參り侍らんと、いひ契りしに、その日は風長閑に、此の頃稀なる好き日なりけれは、かねて契りし如く、辰の時はかり、某の停車場に集りぬ、車は定まれる時に馳せ出てぬ、一時許にして、一つ山の停車場に看きぬ、車を下り、山に登るに、ひと山梅の林にて、今を春へと咲き匂へるさなから雪の如くなるに、所〻に松杉の綠なるか雜りたる、いはん方なし、山のなからはかりに、草の庵あり、主人かねて山守にあとらへ置きけん、清うかいはらひて、炭櫃に火おこして、釜の湯たきらせたり、主人は我等を請し入れて、茶果佈む、しばし談ひて、梅の林見廻るに、花の色香清らなるをはさる物にて、年經たる幹の苔むせるなと見所あり、人皆歌口すさひつ丶、家の後の方に廻り行けは、一きさみ高き所に石立てたり、林の和靖の壽藏とゐりたり、其の裏を見れは、漢文にて故山しるせり、其の大方の心を、こ丶の詞にうつせは、次の如し、我はいみしき世の僻物にて、世の人のましらひ物くさく、世の人はた、我をしれ者といひくたし、物くるほしと貶しめて、まほにももてあつかはねは、我よりも諂らはす、されは、我世の人を厭ふのみならす、世の人も我を厭ふなり、さるからに、年の程また三十はかり、家のなりを弟なる者に讓りて、我は此の一つ山に、草の庵を結ひ、千本の梅を植ゑて、その花を見て、心を慰め、其の實を賣りて、老を養ふ料とせり、百年の後も、此の山の土とな

らんとて、かねて、奥津城所を定め、こゝにしるしの石を建て置くにこそ、天保の壬寅の年二月三日、林のかすやす識すと、あり、其の壽藏も、早うまことの墓所となりぬれと、植ゑ置ける梅は、年毎に花さき實を結ふこそ愛てたけれ、今のあるし和衡といふは、此の和靖の甥なりけり

伊達宗敦の君か園生の梅覩る記

明治の四十年、二月許、ひと日、所〻の梅見廻らんとて、先、淀橋の里なる銀世界てふ梅園を訪ひしに、一木二木の梅は咲きたりしかと、大方はまだふゝみたるのみなりしかば、そこを出でゝ、寒香園といふを見しに、そこもまだ聊咲けるのみにて、見所もなし、かへさには道をかへて、麻布の簞笥町なる伊達宗敦の君が園生を訪ひぬ、此の園の梅は、冬至梅とて、疾く咲くたくひにて、今眞盛に咲き匂へるか、幾本とも知らず、日の光を受けて、まはゆきはかりなり、園は岡の片岨にて、谷へかけて植ゑなめたる、いひしらぬ趣あり、まして松杉の生ひ雜れる、竹村のたち重れるなと、をかしとも愚なり、去年の春訪ひ來し折は、朽ち惜しう盛過ぎたりしに、今日はかう眞盛に參りあひつる、いとこそ嬉しけれ

おくれこし去年のうらみは搔き消にて今をさかりの花のしらゆき

なと獨ごつ程に、姫君いておはして、茶果侑めらる、姫君は正子と聞にて、華族女學校の教子にておはし、をり、我もその校の教授にて物教へ參らせしゆかりに、去年この園に詣でけるに、來ん春もと契りおかれつれば

梅の花今さかりそと告けぬへくおもひし君そけふ來ましつる

と歌はれけれは

眞盛を見るそうれしき梅のはな花の使をまたて來つれと

姫君また

咲く梅の花の心やいかならん契たかへす君はとはれつ

かへし

鶯にたくふことの葉うたひ得ぬわれをうとまむ花のこゝろに

此の頃のみたり風にて、世の人多く煩ふと承り侍れは、寒さを厭ひて、垂れこめてのみ侍りけれは此の園の梅も、けふなん始めて見侍るとて

契り置きし君し訪はすは風さむき園生の梅を見てやちらさん

といはるれは

中〻によそより來つる我しもそみ園の花を君に見せける

などよみかはしつゝ、花を愛てはやしをる程に、西日に成りて、風も身にしみて覺ゆれは、たれこめてのみおはしゝ御身の、さはらせ給はゝ、いみじからまし、今は入らせ給へ、おのれも罷り侍らんと、いへは、さは御家苞にとて、青侍にさるへき枝折らせてたふ

これやこの蓬か島の玉のえたあやへたくみも造りあへめや

月前梅

前栽の梅今を盛にて、夕闇の空にもしるく見ゆるに、月のさし昇れは、花の匂、空の光に照りかはして、愚ならすをかしきは、何かしの殿の御庭なりけり、夜更るまてかうしおろさせ給はぬは、花の色、月の匂を御覽しいたさせ給ふなるへし、猶飽かすや思すらん、童おろして、梅の花折らせ給ふ、御身つからも端近う出ておはして、あな面白の夜や、昔北野の神の、をさなうおはしゝ折、月の光は霽れたる雪の如く、梅の花は照れる星に似たり、しか〳〵と文作り給ひしも、かゝる花のかけにそありつらんと、宣ひて、更に童を呼ひかけ給ひて、あ子は此の頃敷島の道たとり初めつと聞く、北野の神によそへ奉るもかしこけれと、いかならん事をも言へと宣へほ、わらは、あなかしこ、歌なと申さん事は、かけても思ひより侍らぬを、唯かうなんつかうまつり侍りつるとて、梅か枝をさゝけて

梅の花その匂さへ白妙の月影なから折りてけるかな

とはいふものか、童ことにてはよしやあしや

柳

我か庵の隣に、大きなる柳の有りけるか、程狹き庭にはむつかしとて、伐り捨てけるを見

て、其の本つ方少したひてんやと、乞ひつれは碎きて、薪にし侍らん物そ、おほさんまゝに、きり取り給へと、いはれけれは、いと嬉しく長一尺はかりを切り取りつゝ徑は八寸許も有るるなへし、それを淺き水鉢にするゑて、水さし置きけるに、春に成りて、處〻に芽を出たし、水にひたりたる處よりは、根を出たしつ、いと嬉しく、日毎に水さしそへなとしけるに、根はいと多くさし出てゝ、髭のやうに見ゑ、芽もやうやう枝に成りて、若やかなる葉は、をとめの眉のやうに見えたる、いとらうたし、かくて枝の伸ひ過きたるは、よき程に切り、葉のしたゝかなるは、摘みとりなとさるへきさまにつくろひなし、畫は小床にするゑて、愛てはやし、夜は外に出たしなとしたつきけれは隣のあるじも訪ひ來て、見愛て羨むもをかし、何かしの書に、夏の日家の内を涼からしめんと思はゝ、柳を多く、水瓶なにさし置くへしと見えたるは、柳はいみしう水を吸ひあけ、又いみしう水の氣を吐く物なれは、其の水の氣の立つにつれて、暑き氣を誘ひ去る物なれはそかし、此の柳も夏に成らは、いとよく茂らせてん、さらは今年の夏は、所せき宿も、さはかり暑かはしうは覺

えさらましと、かねても嬉しう

獨待花

花は年〻かはらす匂へとも、人は年々同しからす、髮白け顏皺みて、有し你の變り行くはさるもの、鳥部山の煙、仇し野の露、いつしか消え行く世のならひ、誰かは終に逝るへき我か家の庭に一木の櫻ありて、年々の花の宴に集ひ來る友、十人はかり有りしか、我も人もやう〳〵齡老い行き、無き數に入りしもありけれと、さをとゝしの春までは、猶五人むたりは花の圓居に物せられて、歌よみ文作りなともせられつるを、をとゝし去年は、一人ふたりと、はかなくなりもてゆき、さらぬも老氣にて、床にのみ打ち臥しをれは、今年の花は見に來る人もあらす成りぬ、あな淋しの春や、軒端の花よ、汝たにも疾く咲け、今は汝のみ昔の友、疾く咲け一木の花

濱の離宮花の御宴の記

明治の三十五年四月十七日、濱の外津宮にて花の宴せさせ給ふとの御事にて、我等をも

召させ給へり、此の日ていけよく、日暖に、風も長閑なり、二時過くる頃、華族女學校を出て丶、車をやる、伴ふ人々は、下山歌子、佐野安、土屋弘、秋山四郎、坂正臣は家よりた丶ちにまう昇られぬ、外つ宮の御門を入りて、かねて分ち賜はりしあかしの文を、司人に渡して、可美眞手命の御かたの前を經て、御苑に入る、燕の御亭と申すか前に出つれは、今日召されてまう昇りし人々、御國人は更にもいはす、異國の人さへ男女いと多く、おしこり立ちこみたり、知る知らぬ人〻の中を過きて、松の御亭と申すか前を經て、櫻多き所に到る、皆八重の花にて、今を盛なり、麗しとも愚なり、薄紅の雲間迚りて、御池の汀に出つれは、橋懸れり、橋の半に立ちて見渡せは、彼方此方の岸に並み立てる櫻は、御池の水に影を浸して、千重の白波を重ねたり

これやこの天のうき橋咲く花の雲と雲との中の通路

爰にてそ坂正臣には出て逢ひける、橋を渡れは、潮見の御亭と申すかあり、其の前なる芝生より見渡せは、海の面遙々とうち霞みて、程遠からぬ浦わもほの〳〵見ゆ、まして安房

上總の遠山は見わわかす、近くは砲臺の並ひたる、鯨の波に浮へるか如く、數知らぬ船の帆影は、蝴蝶の群れて飛ひかふに似たり、此の芝生にも人々多く集へり、知れる人もありてうち語らひなとす、そこを過きて御池の汀に出て、岸に沿ひて進み行けは、鶴を飼はせ給へる所あり、和歌の浦と記したる札かけたり

咲く花の雲居に馴れて和歌の浦の芦邊を田鶴も思はさるらん

汀に立ちて、向の岸を見れは、今日の御幸の假のおまし所、花の雲間に見ゆ 猶進みゆくに、大方は松と花との下道なり、松の姿、花の匂世の常ならす、所々には若楓の濃き紅なる、柳の淺緑なるも生ひ雜れり、御苑の西の果に、岡たちたる所を富士見の臺とそ申す、今日は霞深くたちこめたれは、彼の高根の雪の光も包まれて見にす、其の岡の本の廣き芝生に濱床めく物をなめするたり、しはし丶りうち掛けてやすらひ、又御池の汀に出つれは、長き橋ありて、中島に懸れり、中島の御亭は、今日のおまし所と定め給うけれは、此の橋を渡る事を止め給へり、此の御亭は御池にのそきたる釣殿にて、この汀より見渡せ

は、蛤のいふき出てけん高殿かとそおほめかるゝ、此の中島より東の汀へも長き橋を渡せり、此の橋は上の限藤をまつはせたれと、時猶早くして、花はまだふゝめり、花の盛には虹の樣にや見ゆへからん、ゆほひかなる池のおもては、鏡の樣なるに、なよしの折々勇ましく跳るもをかし、魚すらも今日の御幸を待ち悦ふにやあらん、時計を見れは、三時過くる頃なれは、迎へ奉らんとて、元來し道を歸りて、松の御亭のあたりに待ち奉る程に、樂隊の奏つる物の音の中に、うへは陸軍の御服奉りて、歩ませ給ふ、中すも畏き御事なから龍顏雄雄しく、玉體すくれて大きやかに拜まれ奉る、ささいの宮も西の國ふりの御その、紫の色麗しきを奉り、御氣色麗しく見えさせ給ふ、東宮を始め奉り、宮達御やすん所の御方々、諸の省の人々、華族の人々、さては異國の人々、皆御跡に隨ひ奉る、色々の衣、種々のよそほひ、悉言ひつゝけはくたくしかりぬへし、書かすともたゝ想ひやるへし、御苑の花を巡り見そなはして、假のおまし所に入らせ給ふ、此のおまし所は長さ三十間はかり、幅は三間はかりもやあらん、杉板もて屋を葺き、蒲簾もて壁に替へ、柱は青葉もて包み、所々に椿なとの花をさし雜へたり、おましの内は更なり、前の芝生にも、幾百千のいしを立てなめたるに、居並ひたる人々は、雲の如く、霞に似たり、後に承れは、二千三百六人まう昇りたりとそ、衣の色は花の色に照りかはし、袖の香は花の香にくゆり合ひて、麗しとも麗しく、をかしともをかし、うへも御心地よけに、此の長閑なる折から、なんたちと諸共に樂む事を喜ひおほすよし宣はせて、御酒賜ふ、人々心ゆくまてたうへて、樂しく遊ふ

濱殿のみその丶花の春風は薫りそゆかん龍の宮居に

櫻さくみその丶とけき春の日に四方の野山の花もゑむらし

なと思ひつゞくる程に、長き春日もやう〳〵たけぬれは、うへはささいの宮、みやたちつれさせ給ひて、假のおまし所をた丶せ給ひ、中島の御亭の入らせ給ひ、程無く還幸あり、まう昇りし人々も、おのかしくまかつめり

落花

木の花のあまひのみまさんといへるをはしめとして、はかなき事のためしには花をそひくなる、花のちり失する事を恨みて、鳴くにしとまる物ならは、われ鶯に劣らしと歌ひ、身にかへてあやなく花をゝしむかなといひ、春雨の降るは花をしむ人の涙かとさへなんおもひける、その散るさまを雪と見しも多かる中に、空に知られぬ雪そふりけるといへるは、いとたくみにめてたし、又水なき空に波そたちけるといへるもをかしくやはあらぬ、露はかりの風たに無きに、かつ〳〵こほるゝを、見れは、心つからもうつらふなりけり、いとこまやかなる雨にうたれても、あへすおちゝるは、さらてもうつろふへきころになれるなるへし、蝶の羽風にたに、まして鶯の羽尾うちふれては、春風の吹きすさひて吹雪の如くなるは世の常、はやう地に落ちつもりたるも、風にふかれて俄におとろきたちあわたゝしけに飛ひゆくに、おくれて一ひら二ひら、地のうへを走りて、おひゆくか如くなるに風やめは、みなひらに臥して、眠るかことく見ゆるか風ふき來れは又はしめのやうに騒きたつめり、かゝる樣は彼の水無き空にといへる例に、水無き庭に波そたちける

ともいひつへし、又物のすみに吹きよせられたるか、猶しも風のふきくれは、ゆき所なき儘に、水の渦卷く樣に舞ひ昇るなり、花なき里も花そちりけるとは春の雪をこそいへ風に誘はれては花なき里までもまことの花さへちりゆくへし、空に吹きあけられたるか落ちもあへす、終には目も及はぬまて遠く飛ひさるもあり、風のやめは中空よりひらめき下りて、地に落ちとゝまるもあり、ほとほと地におちんとせしか、又吹きあけられて、高く昇り、のほらんとして落るもあり、またうち群かりて、飛ひゆくか中に、きりかけなとにさへられて、庭におちとゝまるもあれは、うちこゐて外にいつるもあり、伴のみやつこ朝きよめすなと、いひけん人もある物を、ちれる花とて、いかて心なく拂ひ捨つへき、塵芥にちりましりたるはあたらしくて、疾く拂ひ清めさりしこそ悔しけれ、ひきかへて清く拂ひて箒の跡うるはしき庭のいさこにちらはひたるは、何某の風流心に、紅葉ちらしゝ昔語もおもひあはさるかし、安保の昔白川の御花見の折、牛の爪もかくれ、車の跡いるまて、餘所のをさへ取り集めて、しかせ給ひしはいかにいみしかりけん、黄昏の庭にちり

しけるは、月の影かともふとは誤たれぬかし、賤の垣根にちりかゝれるは、卯の花のまたきにさけるかとおほめかれ、山畑にちりつもれるは、去年の冬まことの雪に麥生のうつもれたるさまおもひいたさる、神の忌垣にちれるは、ぬさの亂かと見ゐ森の下陰に杉の朽葉にちりましれるも、物淋し、小川の流にうかへる花の水のまに〳〵流れゆくほとに、岸ちかくよれは、かへりて上さまに向ひてのほり、岸をはなるれは、又下さまに流れ、幾度かめくり〳〵て流れゆくめり、又井杭なとに着きたるは、春のなかめにまさりし水かさのさる高さまてのほりたる痕を見せ、筏の床にちりしけるを見れは川上の柚山さくら盛すきたるもおし量らる、うなての水に漂へるは、いつこの苗代にせきいれられん、川のよとみにうかひては、且消ゐ且結ふうたかたにもまかふへし、いつしか井の中にちり入りけん、釣瓶の水にうかひて汲みあけられたる、塵芥のましりたるにひきかへて嬉しくさへおもはる、池の面にたゝよへるを放鯉の餌ともや思ふらん、うかひ出てゝくひけるか、食ふへき物にあらねは、やかてふきいてぬ、また蛙の池よりのほりし時、水にうかへ

る花のそか頭に着きたるを、うるさしとやおもふらん、足してなておとし、目をしはたゝき居るよ、魚の躍れは池の水は波たちて、百重の輪をなして、浮へる花をもたけてはおろしもたけてはおろしつゝそひろこりゆく、水すましの忙かしけにまはりありくに誘はれて、ちりうく花も水の上を廻るもをかし、樫の古葉なとにや、谷川にちりうきたるか、そか上に落ち重りて流れゆくは、舟に乘りたる心地やすらん、花見て歸りて、衣ぬきかふとて、帶ときたるに、ふところより一ひらおちたるもをかし、ありし櫻狩おもひ出てゝ、そのをりの記を開き見るに、紙の間にはさまれたるか、ゆくりなく見出たされたるは、去年の落花なりけり、かはほり傘にちりかゝりたるか、春雨にぬれたれは、着てはなれぬかなつかしく、ひちりこ深き道におちたるか、けいしにふまるゝそあはれなる、乾ける街にちらはひたるか、靴わらうつなとに踏まるゝをはさる物にて、牛馬の蹄に蹴ちらさるゝは、花の心にもくちをしかりぬへし、蛛のいに多くかゝりたる中に、その一ひらの垂りたる糸のはしにかゝれるか、風にふかれて、いとゝくめくりつゝありしに、果は吹きはなたれて

そちりゆく、窓よりやちり入りけん、ゆくりなく硯の海にうかひたるはめつらかに覺ね、盃にちり入りたるには、二また舟の故事さへそおもひうかへらるゝ、をの童ともの、かきつめて握りかためて、つふてにしてうちかはしたるに、うちあてられて、一身ましろになりたるかをかしきに、女の童の針に糸すけて、一ひらつゝ拾ひてさし貫き、ずゝのやうにしたるいと愛しく見ゆ、かやうに序も立てす、そこはかとなく書きつゝけは果もあらし、怪しうこそ物くるほしけれとは、雙の岡の古法師の口まね

早苗

我か若かりし程、さるへき故ありて、安藝の國可部の里に、旅居せし事ありき、此のあたりの習として、早苗取る時は、我か田人の田のわいため無く、一里擧り立ちてそ植うる、牛飼へる家〻よりに牛を出たし、色〻のきぬを角に纏ひ、身にも飾り、背には鞍置き、旗をさへ立てゝ、數多引き連ねて、馬鍬引かせ、一町搔きならし終れは、又外の町に移り行くに、立ち替りて、早苗取る者、田におり立つ、多くは若き女共にて、皆新しき衣着粧ひ、

一つ色の襷取り掛け、笠うち戴きて、一つらに並ひ立ては、それか前に、年たけたるをのこ、四尺許の篠を摺り鳴らしつゝ、向ひ立ち、乙の聲にて、歌の本を謠へは、植女共は、其の末を、甲の聲にて歌ふ、歌ひ終れは、をのこは又歌の本を謠ひ、植女共は、其の末を謠ふ、かくしつゝ苗を植うるに、若きをのこ、徑三尺許の大鞁を、横様に前に掛け、着たる笠の端つ方、ほと〳〵田の水にひづ許、身をのけ様に反らせて、みきりひたりの手に、桴をとりて、歌にあはせて、打ちすさふさまもをかし、田樂のわさをきの起は、かゝる事にそありけん、榮花物語の、田植の事を記せるくたりに、田鞁と言ふ物打ち、笛吹き、篠といふ物つきなと有るを思へは、此の里のならはしは、昔の手振の殘れるにそ有るへき、我か故郷なる木の國なとにては、一つ色の襷かけなとこそはすれ、かはかりことゝしくは物せねは、いと珍しうこそ覺ねしか、我今は此の御里に移り來て、棟を並へ、甍を爭ふ家共の中に住居すれは、早苗取る樣なとは、年比見し事も有らさりしに、今年五月はかり堀切の里に、花あやめ見に物しける道にて、隅田川の川添小田に、早苗とるを見て、昔思ひ

出つるまゝかくこそ

五月雨

五月の空のならひ、雨は日毎に降りて、いといふせし、あねろいどてふていけ計るうつはを、文机のあたりに掛け、置きて、時々これを見るに、針は左の方にのみ傾きつゝ、空の晴るへきしるしも無かりしに、昨日の暮方は、珍しう夕日のさしつれは、さしも降りつゝきし五月雨も、今は果にやと、嬉しくて、彼の針は右の方にや寄りつらんなと思ひて、見れは、元のまゝなり、さはあねろいどは損ひたるにやと思ひしに、夜に入りては、雨いみしう降り出てゝ、夜すからをやみたにせす、夜あけても猶降りつゝき、盡過る比はいよゝ降りまさりけり、あねろいどの針を見れは、すこし右の方に寄れり、されど雨はいや降りに降りしきりて、神さへいみしう鳴りはためきぬれと、あねろいどの針はいよ〳〵右に進みて、雨は降りやみぬ、雲はやう〳〵晴れ行きぬ、西吹く風さわやかに、夕日の影はなやかにさしたるこそ心地よけれ、あねろいどは猶かたゐならさりけり

氷雨

明治のよそち餘ひと年六月やか、五月雨近き頃なから、空晴れ渡りたりしか、俄に夕立めく雨降り出てゝ、神の音をちかたに聞ゐしか、程無く雨もやみしに、白き石の砕にやと覺しき物、蠶豆はかりなるが、一つ、庭に落ちぬ怪し、何ならんと思ふ程に、また二つ三つおちぬ、うちつゝきて落つるを見れは、氷雨なりけり、世の常ならず、大きなるも雜りて、いよゝ烈しく降り注くに、瓦屋、板庇なとに當る音のいみしう高きにぶりきてふ金の板葺ける屋にうちあたる音は、ましていとおとろ〳〵しきに、いかつちのなりはためくひゞきさへうち添ひて、耳しふはかりなるに、庭の石にあたりて砕くるさまなと、物すさましく、木の葉うちおとされ、若き枝のをるゝも多かりき、そのおほきさは、大かたは、蠶豆はかり、梅の實はかりなるか、桃の實はかりなるさへましれりき、我なゝそちに餘る齡の程にも、水無月はかり、夕立の雨にましりて降る事は、度々ありつれと、いつも白豆はかりの物にて、かくおほきなる物の降れるを見し事なかりき、來る日の新聞紙を讀みしに、

芝の區なる白金の町にて、巡査の捨ひしは、長さ五寸七分厚さは一寸はかりなる物なりきといふ、また同し區の高輪の南の町にては、氷雨にうち切られつらん、頭無き鴉の、血あえたるか、空より落ち下りたりとなん、道行く人の傘やふれ、手引の車の幌の、蜂の巣のやうに成れるもあり、硝子の窓の損はれたるましていと多かりき九段の坂にては、老人のうたれて、絶ゑ入りたるさへありき、また品川あたりにては、此の氷雨につれて、辻風おこり、家そくはく損はれ、舟の行くへもなく成れるなともありきとそ聞えし、また神とけさへありて、瀧野川の里にても、四谷の北伊賀町にても、うたれてはかなくなりし人もあり、龜井戸の里にては、家燒けぬともいへり、今年は四月の初つ方、大雪の降りしも、いと珍かなりしに、今またかゝるいみしき氷雨の降りしは、更にめつらかにこそ

川夕立

今日はつとめてより空はれわたり、日の光かしこう照りはたゝけは、黑金も熔けぬへく熱きに、しはしたに此の苦しみを忘れんと、角田川に舟を浮へぬるに、日は早う入りて、川風いと涼しう吹きわたり家に在りてさはかりあつかはかりしを思へは、身をかへたらん心地す、都鳥の夕あさりして、いをゝくふさまを見れは、我か思ふ人はありやなしやと、歌ひけん、昔の夕くれそ思ひやらるゝ、言問の何とかやいふ物うる棚のあたりに昇り來しほと、空俄にかき曇り、風さへ添ひて、夕立の雨いみしう降り出て、神さへおとろ〳〵しうなりひらめけは、彼嘴と脚と赤き鳥もいつちゆきけん影も無し、みめくりの社の鳥居、の雨のうちにほの見ゆるに、其角てふをのこか、雨を祈りし片歌思ひいてらる、とかくする程に、雨はいや降にふり、風はいやふきに吹き、船屋形のすたれふきあけ、横雨はだゝ船の中にふり入れは、舟を漕きくたして、吾妻橋の下にかくれて、晴間を待つ、雨をさけて走りまとふ人の足音、あわたゝしき車の聲、いかつちにひゝきあひて、頭の上にかしかましくきこゆ、しはしか程に空晴れ、雨やみぬれは、橋のもとをこきいつれは、今は日もくれはてゝ、月ははなやかに、堤の梢にのほり、すさひし風のなこりそよふくも嬉し、さらてだに涼しきわたりを、夕立のあとはまして

また

我西の都に住みける頃、ある年の五月はかり、友とちかいつくねて、和泉の國へ逍遙しに、物しにけり、かへさは船路に日を經て、水無月の中頃、難波潟に着き、澪標の本より川尻に入る此の比の照りはたゝきに、川の水ひて、舟上る事難し、かく舟惱ますは、我か爲に水の心の淺きなるへしなと詫ひあへり、まいて、照る日の燃ゆはかりなるに、水の上無德なり、舟も我か身も泥む今日かなとは、今も歌ひつへし、綱手引き上るとはすれと、舟は唯居さりに居さる、辛うして、鳥養の御牧といふあたりまて來る程、遠方に鳴神の音聽きしか、やう〳〵近つき來て、落ちかゝりぬと覺ゆはかり、鳴りひらめくに、舟こそりて、賢しき人も無し、夕たつ雨は瀧のやうに降りそゝけは、ふける笘も洩りて、皆人の袖もしとゝになりぬ、さこそいへ、夕立のならひ、しはしか程に、いかつちは遠さかり、雨も晴れ行きけれは、笘ひきあけて、見いたせは、川水は俄にまさりて、濁れる波岸を浸せり、此の川飛鳥川にあらねと、瀬は皆淵とそ成りける、かくては舟は安く漕き登るへけれは、

程も無く京に歸りつくへしと、皆人額に手をあてゝ、喜ふ事二つなし

夏月

今日は、富士のみ雪も消え果つてふ水無月の望の日にて、畫の程の暑さは、殊にいみしく、身は甑の中に在るかとさへ思はれぬ、夜に成りても、暑さは猶薄ろかす、空は曇り塞りて、風の通路も絶ぬるにや、庭の木の葉はそよとたにいはす、あな苦し、かうあつかはしうては、いかてかうまいのせらるへきなと詫ひ居るに、近きあたりの人〻も、寐られぬにやあらん、談ふ聲の聞えしか、今は亥中はかりと思ふころほひ、雲やう〳〵晴れて、月の影ぎら〳〵しう見え初むるにあはせて、風さへ吹き立ちて、宵の程の物むつかしかりしに引きへて、心さへ晴れやかに成りて、畫の暑さも忘れ果てぬれは、今は心地よき夢も結はれぬへきを、かく許すゝしく清らなる月影を見捨てゝ、閨に入らんは、さすかにあたらしう思はるれは、西に成るまて、眺め居るに、風はいよ〳〵吹きまさりて、衣の袖薄きをおほゆ許に成りぬれは、富士のみ雪も今こそ降り初むらめとそ

夕顔

名は人めきて、奇しき垣根、むね〳〵しからぬ軒端などに、這ひまつはれる夕顔よ、くちをしの花の契やなとも、昔人は言ひ、歌にも讀みて、古好む人の目には、何となう優に見ゆる物から、旨とは實を取る爲に、賤の男などのうゑる物にて、花を愛つとては、庭などに植うる人はいと稀らなりけり、何かしの君はみやひ心ふかくおはし、北の方はた好みて歌よまるゝに、萬葉古今をはしめ、何くれの集ともに見えたる草木を集めて、廣き園生におほされたるか中に、夕顔をも植ゑられたるか、此の頃花盛なるへし、ある日夕つ方訪ひ參らせけるに、御園生にいてませりと靑侍の言へは常よりうらなく親しうせさせ給へは、ふと御園に參りけるに、主人めをとこの君たちは、夕顔棚のもとに、靑瓷のあくらたつ物にしりうちかけ給ひて、けふり草の卷けるを燻らせ、岐阜の扇手ならしなとしつゝ、睦しく談ひ居給へり、てゝらふたのゝ奇しきさまならて、男君ば明石ちゝみのかたひらに、博多織の單の帶結ひ給ひ、女君は紺結のちゝみ絹のかたひらに、繻珍とやかや織物の

單の帶結ひおはさうす、夕顔棚は、杉の赤木の柱を立て、靑竹の磨きたるを、經緯に渡して、黑めたる蕨の繩して結ひたるに、いと靑やかなる蔓心地よけに這ひまつはり、枯れたる葉一つ見えす、花の心にもかゝる園生に生したてられたるを嬉しとや思ふらん、主人の君は我かまゐれるを見給ひていさ給へこなたへと、靑瓷のあくらたつ物に手をさゝる、ゆるい給へとしりうちかけ、まつ、此の頃の暑かはしさに、おん恙もまさてなと問えもあへす、夕顔の淸らなるにかう園守の手を盡して、いたつきたれは、いとゝ麗しくて、西の國より移し來し花ともの、こちたきよりも、勝りさまにこそ見え侍れなと、うち談ふほとに、主人の君

夕顔のにほふを見ても思ふかなさしもいふせき賤か伏屋を

やんこと無き御身にも、まとしき者の上をおほしやらるゝこそ貴けれ、北の方も

夕顔のゑまひえならぬ花見てもさた過きし身のおもはゆきかな

扇して口うちおほひて、しのひやかに歌はるゝもいと優なり、我もかくこそ

ゑみの眉開くもうへな麗しき園生におひし花の夕顔

御歌共にえ及はぬか妬さと、きこゆれは、いみしきひけかなと、君達は笑ひ結ふ

照射するかた

生ける物殺すは、佛の道の戒とする事なれと、鳥獸魚なとのしゝをたうへでは、人の身を養ふ事かなはす、おのつから命も短くなるへきことわりなれは、せちみはやがてわれとわが身を殺すにおなじ、畑つ物、田なつ物、さては野山におのつから生ふる物とりて食ふも、それはた生きたる物なれは、猶鳥獸を殺すにいくはくのたかひもあらし、ねうなくいける物殺さんこそ惡しからめ、をし物にする料に鳥けものなと取らん、あしき事かは昔ある法師の、獵人の鹿とる事をとゝめてもうけひかぬを、諫め詫ひて、おのれ鹿のさまに、身をよそひて、かり人に射られて死なは、さすかに彼も道心おこして、狩する事をとゝむへしと、鹿の皮かつきて、山に入りて臥したりしに、狩人は眞の鹿と見なして、ほと〳〵射んとせしに、よく見れは人なりけり、彼の法師のわれを諫め詫ひて、身を捨てゝ

たに、心改めさせんとまて、思ひつる事の有難さに、やかて法師になりたりとなん、殺生の罪は、さはかりふかきことに思ひ、身を殺してたにやめしめんとせし志はさる事なから、あまりおろかしき事と、かねて思ひつるを、今このかたを見て、思ひいつるまゝかくこそ

蓮

水無月の或日、亡き父の忌日にあたれは、墓詣せんと、つとめて菩堤寺に物しつ、方丈を訪ひて、大德とうち談ふ、池の蓮も今眞盛に侍り、見そなはせ、といはるゝに、端近う出て見出たせは、さしも廣き庭の池も、水見ねまて、生ひ茂れるさま心地よし、なへて綠なる葉の間に、白き紅なる花の匂へる、麗しさは、何物かはこれに勝らん、花はさる物、その葉さへ香のありて、涼しき朝風にかをり來るゆかしともいはんは中〻なり、市中のあつかはしく所せき宿に住める身は、焦熱の地獄を離れて、極樂の七寶池に遊ふらん心地して、しはしあからめもせす見て居る程に、大德手を打ち給へは、をゝといらへて、らう

たけなる兒いでく、例の木の芽參らせよと、のたまひつくめり、しはしありて、いと古めかしきする物のまりに、木の芽にそゝきし湯の、黄金色したるを入れて、白金の臺にのせて、大德にも我にも侑む、うちすゝれは、いみしうかうはしく、味よき事、世の常ならす、こはいかなる木の芽にか侍る、あやしうこそたゝならねと、問へは、大德うちほゝ笑みて、それは夕つけゆく頃、木の芽を紙に包みて、今朝はかり開けたる蓮の花の中に入れ置けは、日の暮るゝにつれて、花ひらのつほみて木の芽を包み侍るなり、來る日朝日のさし出つる頃、花のふたゝひ開くる時、とりて、例の木の芽のやうにしてたうへ侍れは、蓮の花の香木の芽の香に雜りて、いひ知添ぬ味こそ添ふなりけれ、唐土にてはこれを蓮花茶となんいふなる、梅花茶、茉莉茶なといふも侍るよし、茶譜てふ書に見ね侍りといはる、いと珍かなる物をたまはる物かな、亡き父も然る事申し侍りつれと、まだたうへ侍らさりしに、今日こそ御德にて始めて味はひ侍りつれ、蓮の花は色麗しくして、目根を樂ましめ、香の清くして、鼻根をよろはこはしむる物と思ひ侍りしを、かく舌根をさへ樂しましむるこそ嬉しけれ、さはれ蓮植うる池無き宿にてはかなはぬ事そなと詫ふれは、しか好ませ給はゝ、調しおけるを分ち參らせんとて、金の筒にこめたるを得させ給ひつれは、もて歸る心地の嬉しさそいみしきや、歸るすなはら此の茶を亡き父に手向けつ

某の里の德者令の殿をあるしす

某の縣某の里に德者ありけり、大浦てふ所になりところもたりけり、海にのそける高殿にて、景色うるはしく、浦風いと涼しき松蔭なれは、一日令の殿すゝみしに物し給はんと、人していはせけれは、あるしいたく悅ひて、あはれ高殿のめいぼくかな、殿のみ心とらん爲には、いかなる事をか物すべき、よき酒よき肴も嬉しとはおほさし、絲竹の調もききあかせ給ふへしと、とかうかうかへ詫ひて、我にはかりけれは、昔われ我か君と仕へまつりし殿の君の、またをさなうおはしゝをり、らうし給へりし御城は、海近かりけれは、しか〳〵かう〳〵して遊ひ給ひき、そは近く仕へまつりし我等も、めつらしく思へりき、さるは御遊に召されて網ひき釣せし蜑ともなとや、敎へ參らせけん、此の事かならす、令

の殿の心にかなひなん、此頃のあつかはしきに、水によれる事こそ、ふさはしからめとい
へは、あるし手をうちて、そはいとめつらかなる事かな、さはいへと、かならす事なり侍
るへくやと、頭かたぶく、さなうたかひ給ひそ昔わかまさしく見し事そかしと、いへと、
あるしは猶おほつかなく思ひて、心みけるに、わか云ひしやうなりけれは、いといたう
よろこひて、賢うもはらせ給へり、さてこそ令の殿も悦ばせ給はめとて、もはらその設
したりけり、ほともなく契りきこえし日も來にけり令の殿はつかさ人たちをつれていて
ませり、あるしかしこまりて、けいめいし罵る、かゝるふせやに御車よせ給ふ、かたしけ
なさ、なと悦ひきこゆて、高殿に請して、まつ茶くたものすゝめ、さしつきて酒物いたす、
をし物はさらなり、うつは物なとよき物のかきりにて、さても猶み心にかなはすやあら
んと、心つかひ大かたならさりき、杯幾たひかすむ流れて、みな醉心地のたのしきに、浦
風吹き入りて、凉しき事限無し、あるしさるへき時を見て令の殿にまうさく、かうふりは
へさせ給ひつるに、おろそかなるあるしこそかしこけれ、何はかりの物にもはへらねと

も、おんなくさめぐさにもと、おもうたまへまうけつる事の侍る、かしこの高殿へ渡らせ
たまはらはやときこゆ、令の殿さらはしるへし給へ、皆人たちも諸共にとて、あるしにひ
かれてものし給へは、疊四十ひら敷くばかりの高殿にて、かも敷きわたし、いと大きやか
なる水船を据ゑて、そのめぐりに裀しきめぐらし、短き釣竿を一つゝ置きて、餌を入れた
る堞と、魚入れん料の籠をそへたり、水槽の中を見れは、鯖の子、鯛の子いとあまた游き
をり、令の殿まつ竿とりてつりし給へは、鯖を得給ひつ、いたう悦ひて、また釣をたるれ
は鯛を得給ひぬ、まらうどたちも、いづれも〳〵あまたの魚を釣り得たり、魚どものかく
餌を貪るもことわり、この日頃餌をくれすして、活け置きつればなりけり、かゝれば、み
な人の籠は魚の滿たぬもなし、令の殿うちほゝ笑みてかゝるおもひかけぬ興ある事こそ
なかりつれ、この魚調せさせてよ、これをさかなに、今ひとたひみきもこゝちよくたうば
らんとて、もとの高殿に還り給へば、あるじはまらうとたちの籠をおろして、くさ〳〵に
調して、酒侑む、殿をはじめ、皆人も、みつから釣りし魚を肴にして、たうふる、味さへ異

なる心ちして、こゝちよげに杯とり給ふ、さて夕けのおものすゝめきこゆて後、今一より釣し給はじやと、問ひきこゆれは、殿うちゑみて、餘りふくつけゝれとて、嚮の高殿へわたりて、籠にみつまて魚つりて、こたひのはさなから家つとにして、歸り給ひつゝくる日つとめて、なり所をとひて、いかにそ、昨日の魚釣は、殿の心にやかなひつると、問へは、あるじはいといたう嬉しげにきのふはまらうどのこよなく悅びて、遊ひ暮らし、景色よく歸らせひつるは、みな我が佛のみかけにこそと、涙おとして我を拜むもをかし

七夕

今日は舊き曆の文月七日にて、はやう秋は立ちにたれと、殘る暑さの猶強けれは、端近う出て居て、夕すゝみしなから、空を見れは、片破月は傾きて、天の川白う見ゆ渡り星の光のきらめくに、臥して見る牽牛織女の星なと、うちずしつゝある程に、うまこの童、螢を逐ひて、はしり來たるを呼ひて、きんちは昔より此の近き頃まて、家〻にて此の月の今日しも、祭り來たりし棚機の星をや知れる、まろはさる星をいまた知り侍らす、さは教へて

ん、天の川の東にありて、爰より見れは、桐の梢にかゝりて見ゆる三つ並へる星の、中なるはあきらかにして、左とみきりなるは、さしもあきらかならぬそあらん、けにさる星そ見ゆ侍る、それ犬飼星てふ星にて、唐名は牽牛、又は河鼓とも稱へ、西の國にてはあくいらと稱ふる星の位の中に在りて、棚機のをとこなり、また天の川の西に、三つ角に三つ並へる星の西の角なるか光強く、いちしるく、北と南の角なるか、光薄きあらん、けにさる星そ侍る、それこそ棚機よ、棚機津女ともいひ、唐名には織女ともいふなり、西の國にては、りいらと稱ふる星の位の中に在りて犬飼星の妻なりといへは、童うちうなつきて、二つの星はおんをしへをうけたまはりて、辨へ知り侍り、さても此の星を祭るには、いかなる事をかし侍りし、と問ふ、昔はは大内にても、乞巧奠とて、四つの机を並へ、そのめくりに、九つの燈臺をおき、前の二つの机には、いづれも梨、桃、さゝげ、白豆、瓜、茄子、なとの果と、薄鮑と、酒杯とを置き、後の二つの机には、いつれにも、蓮の花十房盛りたる盆を置き、猶香爐をすゑて、百和香てふたき物をくゆらせ、箏の琴、あるはやまと琴を、二つの机

に渡しかけて、祭らせ給ひしよし、書にも見わたり、臣下のうち〳〵にも、彼の御儀式にならひてそ祭りけん、中頃には、梶の葉に歌かき、又願の絲とて、五色の絲を竹に掛けて手向け、棚機に貸すとて、衣を物にかけ おきなともしたりけり、さるは棚機津女に祈りて、裁縫の業を始め、すへて女の手業のたくみにならん事を、願ひしなりけり、近き頃は、手習ふ童部とものすさびとなりて、五色の紙を、短冊の樣にきり、歌なと書きたるを、竹に掛け、瓜茄子なとを、机におきて、祭りつるか、それたに今は絶え果てぬなと、星祭りし事に就きて、物せしくさ〳〵の事とも、語り聞かせけれは、おほちの君は更にも申さす、て、〳〵の君も、若かりし程は、さる事して星をや祭り給ひけん、昔ならましかは、今宵はまろも竹たて、果手向々なとして、祭りてあらまし、そも〳〵牽牛織女てふ星は、いかなる神たちにてかおはする、それにはおもしろき物語そあなる、されと祭の事を語りつれは、星神の事は、またこそ語り聞かせめといへは、童近く寄り來て、おほちの君、いかて〳〵今その 物語聞かせ給へ、聞かせ給へと、せん方なく責むれは、しかねもころに乞はるれは、惜しくはあれと、語り聞かすべしと、襟かき合はせ、うち咳けは、童うちほゝ笑みておほちの君さなこと〳〵しくふるまひ給ひそ、とく〳〵と急かしたつ、昔高天の原におとたなはたと申す姫神おはしましけり、衣裁ち縫ひ、機おる事はさらなり、すへてをみ、なのすなる手業、いとたくみにして、しかも、おこたり無くたちはたらき給ひしかは、天の帝あはれと覺して、河の東の、犬飼星にあはせ給ひしに、をとこの星神と戯れ遊ひて、衣縫ひ機織る事を怠り給ひけれは、天の帝いたくふづくみ給ひて、めをとこの星神を、川を隔てゝ往ましめ給ひ、年に一夜の逢ふ瀬をゆるし給ひき、今宵はその逢ふ夜なりけり、彦星の河を渡る時は、あまたの鵲集りて、橋と成るとそ、いかにおもしろき物語ならすやと、いへは、しからは、今宵はねふたくとも起き居て、犬飼星の天の川渡るを見侍らんと、まめやかにいふめり、いなや牽牛の星もすへての星のやうに、いつも〳〵一つ所に居て、動く者ならす、まして天の川渡りて、棚機津女の所にや物すへき、時のたつにつれて、東より西に移り行くと、見ゆるは、この世界の西より東へめくるなりけり、汽車、電車なと

に乗りて行く時、かたへの物の動くやうに見ゐて車の走るを覺ゐぬと、一つことわりそかし、さは今のたまひし御物語は、空言にや侍る、まことは空言そ、天の川といふも、まことの川にあら、す數知らぬ星の重りて、しか見ゆるなり、二つの星の、あひはなれたるあはひ、幾里とも計り知られぬはかりなれは、その光のたかひに照りかはす程たにも、幾千年を經すはと、き難かるへし、いかて一夜のうちに、ゆきかふへき、これは、昔諸越人のいひ出てし事なるを、我かみかどにまて、いひ傳へて、うつたへにさる事とは思はさらめと、ならはしと成りて、祭りなともする事には成りたるなるへし、といへは、昔人はさはかり愚にて、かやうの事をたに、猶まこと、は思ひけるにやと、うち笑ふ、開け行く御世のみかけに、きんちかやうなるをさなき者すら、ことわり無き事はうへなはぬを、むかし人は日の中に、三つ足の鴉住み月の中に兎ありて、桂の木蔭にて、藥をつくなとさへそいひつたへたると、いへは、童ます〳〵わらふ

稻妻

稻妻は、幻、水沫、物の影なと、共に、はかなき物の例に引かる、者にて、雲間なとより、きら〳〵と顯れ、瞬く樣に見ゆるか、見ゆるすなはち掻き消ゐて跡もと、めす、實にもはかなき物なりけり、かうはかなき物なから、今の世に電氣とてもてはやさる、は、此の稻妻の一つ物にそ有りける、電車、電燈、電信、電話、其の外電氣を起こして、くさ〳〵のはたらきをなさしむる者いと多く、世の人の爲、いみしき功を顯せは、いかてかはか無き物とのみいひくたさん、空にか、やく稻妻も、唯徒の物ならす、電氣は物を引き分くる力の有る物にて、酸素と窒素とのよりあひて成れる空の氣をわかては、窒氣は稻の養と成り、秋の田の實を豐ならしむ、されは、稻田のめくりに、電信線の如く、黑金の糸を引き渡し置かは、空の電氣を引きて、一しほ稻を榮ゑしむへしとそ、昔人も此の氣の稻に由緣ある事を知りて、稻魂とも稻妻とも、稻つるみとも呼ひ成したるなるへし

薄

八千矛の命の、山との一本薄と、歌ひ給へるを、始として、薄をよめる歌數知らす多く、ま

すほの薄、まそほのすゝきてふ名のひめことを、簑も笠も取りあへす、きゝにいきたるまめ人さへありき、薄は秋の七草の一つにかそまへられて、いといたういうなる物なれは、秋の野のおしなへたるをかしさは、薄にこそあれと、枕の草紙には記されたり、けにさはかりの物やはある、我もこれをこそいといたう愛てたくは思へ、ある日野邊に出てしに、薄の多かる所にて、手をさし出て招くやうなるかなつかしくて、彼方此方見ありく程に、秋風の吹き來るまに〳〵、怪しき音の聞ゆれは、何ならんと、音のするあたりを尋ぬれは、あなあさまし、雨露にさらされたる人かしらの目の穴を通して、生ひ出てたる薄の、風に吹きならされて、音するなりけり、あなめ〳〵といひけん昔おほえて、あはれなる物から、いとむくつけくことさめてこそかへりしか

初雁

庭に花園作りて、あまたの花植ゑおほしたるか、此の頃は萩女郎花をはさる物にて、くさ〳〵の花も咲きゝほへるか中に、にち〳〵くわといふかあり、清原のおもとか書ける冊子に、かまつかといへるは、この花ならんとそ思はるゝ、また葉鷄頭といふ草も、植ゑましへたるか、こは花ならねとも、色うるはしうて、花はつかしき匂あり、此の二くさは、共に雁來紅とそ文字には書くなる、はやう雁の來る比と知られて、赤き花、紅なる葉は見えはしめつるに、その夜寐覺めて聞けは、かり〳〵といふ聲のきこゆめり、されはよと、起き出てゝ、庭の戸おしあけて、見出たせは、有明の月秋霧の上にさしのほりて、一つらの雁の鳴き渡るものか、霞みていにしもこれならんと、思はるゝに、文字なす影のほのめくにも、誰か玉章をかけて來つらんと、問はまほしうなん、かく雁かねの渡り來るを見るにも彼の二くさの名に背かて折知るこそいみしけれ

虫

秋鳴く虫は、いろくさ多かる中に、殊にいうなるは、松虫にこそ、我は年々松虫を飼ひて、聲のしめやかにあてなるを愛てたのしみ、或年は雌雄を飼ひて、かひ子產ませ、かへして育てし事も有りき、されと籠にこめ、かめにいれて、飼はんよりは、庭に放ちて啼かせん

こそをかしからめと思へと、放たはやかて垣根なとを潜りて、逃け失せなんと思ふに、かうかへ出てし事こそありけれ、庭の池に中島作りて、そこに放たは、逃れ出つへき道無けれは、かならすそこにのみ居て、果はかひ子産み、そこにておのつから生ひ出てんとて、さるへき様に島作りて萩、薄、女郎花、さては熊笹なと植ゑましへ、蚤の程虫のひそみ居るへく、石をたゝみなと、事全く整ひしかは、あまたの雌雄の松虫を買ひて放ちけり其の夜は所に馴れぬけにや、大かたは鳴かさりしに、くる夜は夕つけ行く程より、をかしき聲して、鳴きかはすに、月は庭の梢にかゝりて、池水にやとり、中島の萩薄における露にきらめくさまは、虫の鳴く音に一しほの興を添へぬ、籠の内、瓶の中にて啼くにくらへてはこよなくこそ

また

ある日、わか門に虫賣るをのこの來たるを呼ひ入れて、いかなる虫ともをかもたると問ふに、松虫、鈴虫をはさる物にて、大和鈴虫、艸雲雀、かんたん、きりゝす、轡虫なともたり、と答ふ、孰も二つ三つつゝ買ひとりて、籠にこめて、枕邊にかけおきけるに、夜になりて、おの〳〵聲をつくして鳴く、そが中に、轡虫は、げに馬の轡くか如き聲して、いとかしかましく、近くてはなつかしからぬ物の聲なり、さればその籠は、庭の木の枝にかけさせつ、鈴虫、松虫、きり〳〵すなとは、聲餘り高からす、又餘り低からす、されは家の中の少し離れたる方に、その籠はおかせつ、大和鈴虫、草雲雀、かんたんなどは、聲いと低くして、遠くては聞き難けれは、その籠は枕邊におかせつれは、細きもいとよく聞かれぬ、されは孰の虫もをかしく、おもしろくきこえて、いと樂し、われは睡る事少きさがにて、ともすれは、一夜睡らて、明かす事のあるを、此の虫ともを倒ひて、そのさま〳〵の聲を聞けは、おのつから心もすみて、睡催すくさはひとなり、寐覺めては、淋しさ慰る友ともなりて、いと嬉し、かゝらは、疾くより倒ひてまし物を、此等の虫は、早う夏の程より、賣に出てしに

また

月あかゝりける夜、そゝろありきして、とある野へに出てけり、萩薄の露わけて、野路たとり行く程に、いかなる人のなり所にかあらん、いとしめやかに住みなしたる家ありけり、竹垣泄るゝ燈火の影幽に、琵琶のしらへ琴の音いとゆかしうきこゆるに、いかなる人のすさびならんと、心にくゝて、垣の本に立ち寄れば、物の音はやみつ、くちをしき事かな、かなで果てたるにこそと、思ひながら、かいま見るに、すだれをすこし短く巻きあけて、一人は、柱に居かくれて、軒端の月をさしのぞきたる顔いみしうらうたけに匂ひやかなり、そひ臥したる人は、琴の上にかたふきかゝりて、夜深う成るまゝに、月はかう澄みまさり侍るを、今一より秋風の樂などをやあそび侍らんと、いへば、前に置きたる琵琶とりて、ゆるらかに掻き鳴らす、今一人もなつかしくあいきやうつきたる爪音に、琴掻きあはすめり、妙なる調空に澄みわたり、すこうさへ覺えて、月の前ゆく浮雲も漂ひぬへし、いみしう身にしみて、うつし心も無く聞き居たるに、垣のとに人おはすと、告くる人やありけん、簾おろして入りぬ、たなそこの玉とられたる心地して、いとくちをしう思ふ折しも、松の露ほろ〳〵散りかゝりて、冷かなるに、うちおとろけは、轉寐の夢なりけり、庭の叢に松虫鈴虫などの、聲をつくして啼くなるか、さる夢には結ほれてそ見えつらんと、聞き過くし難くて、窓押しあけて見出たせは、かいま見し俤は、闇にも見えて、月は入りぬ

月

四つの時いつはあれと、秋こそ月はこよなけれ、最中の月、後の月はさる物、萩薄を手向けて祭る、なまめかし、最中の月は、唐土にても愛てはやすならひなるを、後の月とてはことに愛つる事なし、わがみかどにて、この夜の月を愛てはやす事は、亭子の院の御時より始まりつとそ、この二夜をおきて、文月のもちこそ、こと月にはまさりて覺ゆれ、葉月の望の頃は、秋もはやう半にて、宵の程こそあれ、夜ふけては寒さ身にしみて、久しく外にあらは、ともせは、風もひきぬへし、まいて後の月は、一しほ寒く、夜ふくるまて外にありかたし、文月の望の頃は、晝は猶殘る暑さの強く、夜になりて涼しさ覺ゆる程なれは、

外に居て、月を眺むるも心地よけれはなりけり、伴の蒿蹊か、名にしおふ葉月長月の月はあれと、月はふつきの中空の月と、歌ひしもことわりとそおもはるゝ、すへて望月のこよなきをはさらにもいはす、いさよひ、ゐまち立待、臥待、寐待いつれも愚ならす、三日月、弓張月、有明の月哀なり、三日月は文月のこそ、これより月のいみしからんと思ふに嬉し、並の岡の古法師の、月は隈なきをのみ見る物かはと、いへる、實にさる事、塵はかりの雲も無くはれわたれる空に、是一つかゝれる、いふへきにあらねと、白雲のこゝかしこにたなひける空に出てたる月、をかしうこそ見ゆれ、木の間の月またいみし、松の葉こしにほのめくはさらなり、竹の葉こもりにきらめくも、まいて窓のあかりさうしに、墨かきのやうなる竹の影うつしたる、ふりかたし、大海原に、黄金の波をたゝみて、うしほと共にさし來る月、心地よし、濱の眞砂路白う照せる、またきに霜のおくかとそ見ゆる、噴き揚くる庭の清水にうつりて、ちゝに碎けて、昇り降る影の、いとなけなるに、かたへの池水の底に沈める影の、魚の鰭ふるに、僅かにゆらくも靜けし、鹿の音のほのかにきこえて、遠山の端に出てさしたる有明のほそりかなる、あはれとも愚なり、稻葉の雲の、霧に沈めるに、かゝしの影をほのかに見せたる弓張月、蛛のいにつらぬかれたる露の白玉に宿れる軒端の月など、心ひかれすやは、かやうにそこはかとなくかきつゝくる、物狂ほしき業なから、月並の文の圓居の今宵の兼題は月なるを、今日までおくらかしたれは、とかう思ひ回らす暇たに無く、走書に物しつ、今宵すぐさはとくやりてん

仲秋

大谷某と、伴某とは、親しき中らひなりけり、常にかいつらねて逍遙し、訪らひかはしなとしけり、今年葉月望の日、大谷の某、伴の某のかり文つかはしけり

僕今宵將月賞君幸賁臨

八月望　　大谷禎三

とありけり、伴の某披き見て、おもへらく、ろ無う月の宴に呼はれたるなめれと、禎三てふ名こそ心得ね、某はかゝる名つきたる事も聞かぬ物を、こは堀川の院の御時、江帥か菖

蒲奉りし狀に、習はれたるなるへし、其の狀に、大江の匡房とは書かれすして、大江爲武とせられしなり、禎三も此の定なるへし、これ讀み得ではくちをしがらましと、とさまかうさま、讀み試みしに、けに三十文字餘り一文字に讀みなされぬ、かへり事もかうやうならでは、をかしからしとて

賢兄今夕招迂弟盍拜趨

桂月十五日　　伴操蘭

と書きて遣りつ、さて日も暮れければ、大谷のかり物しつ、主人待ち迎へて、高殿に請して、けふの文はいかに讀み給ひつやと問ふ、僕今宵將賞月を我こよひ月めてんとす、君幸賁臨を、君來ませ、八月望を、は月のもちや、大谷禎三を、たゝにあかさむと、讀みたりといへは、主人手を打ちて、君は今の世の弼の少將になんおはすると譽むれは、伴の某も、やつかれかかへり事をはいかに讀み給ひつると、問ひかへせは、主人うちほゝ笑みて、とかう考へて、辛うしてなん讀み得侍りし、賢兄今夕は、君こよひ、召迂弟を我をよふなり、

盍拜趨をなど行きて、桂月十五日を、葉月のもちを、伴操蘭を共に見さらんと、讀み侍りき、君か御心にたかへる所侍らしや、蓐たかふ所を侍らぬ、君も師賴の卿に劣らぬ御ざいこそおはしけれなと、談らひ居る程に、月は東の空にさし昇りぬ、空には塵はかりの雲も無く、いとさやかに照り渡る、主人もまらうとも、かたみに心置かぬとちなれは、うち解けて、酒くみかはしつゝ、月を愛てゝ、夜の更くるも知らす、折しも鴈のひとつら二つら飛ひ渡るを見て主人の書きて出たせるを見れは

碧落蟾光淨鴈字可數盡

とあり、まらうとはこれを漢文讀には讀まで

天の原月の光しきよけれは鴈のもしをも讀みつくすへし

と歌ひて、我もとて、何處にかあらん、琴の音の聞にけれは

月清誰結夢夜深琴聲聞

と書きて出たすを、主人うち見てしはし案して、かうこそ讀みあけゝれ

月清みたれしも夢を結はめや夜ふけて琴の音を聞ゆか
かやうにはか無き事ともいひかはして興がるも、いとあいたちなしや

萩

今日は八月の望にて、世のならはしに、月祭る夜なれは、朝より手向のくさ〳〵取りしたためしか、さるへき萩の花をなん得ぬ、さるは市にて賣る物は、大かたはいひかひ無き物のみにて、花瓶にさゝんもすさましけれと、せん方無くは、それをたにと、思ふをりしも、某の君の許よりとて、いと麗しう咲きたる白き紫なる萩の花に、ますほの薄とりましへ、文添へておこされつ、いと嬉しうて、そくひ放ちて、披き見るに、待ち渡りつる秋のもなかも、早う今宵に成り侍り、つとめてより塵の曇も侍らねは、今宵の影はかならすさやかにそ侍らまし、庭の萩も眞盛に侍れは、例の人〻集へて、萩の宴をかけて、今宵の月をも愛て侍らはやと、かねては思う給へ構へしを、あやにく、此の比はみたり心地いと惱ましうて、ほいとけ侍らぬこそくちをしけれ、されは、此の花をたに御覽せさせんとて、つと

めて手折らせ、本燒かせなと、水吸ふへう物したるを參らせ侍り

共に見ぬ恨はさてそ慰めん月に手向よ庭の秋萩

とあれは、かへしはかくこそ

宣ひつけさする樣に、今宵の影はさやかなるへき空の景色になん、御園の萩の花の宴にそへて、月の圓居せさせ給はんと、己をさへ呼はせ給はんの御あらましも、御心地の例ならすおはすれは、と〻めさせ給ふとか承るこそくちをしけれ、麗しき萩の花に薄をさへ添へて、賜はせたる、たに嬉しう侍るを、玉の御詞をさへかけさせ給へるそいみしきや

秋萩の露のたまもの言の葉の花さへ添へて月に手向けん

月讃の神も、殊に嬉しとおほすらんかし、かしこや

葬狩の記

何の國くれの里に、德者ありけり、黄金白金をはさる物にて、田畑山林なといと多くもたりけり、家のあたりに松山あり、これもこの人のらうする所なりけり、今年は雨しけかり

けるけにや、例よりは茸多く生ひつれは、かうの殿を請し參らせて、茸狩しけり、我も此の德者と親うし、かうの殿ともあひ知れは、共によはれて物しつ、國府より一里はかりの道の程にて、かうの殿はつとめてすむたちを出て給ふ、供して物する人〻とたりはかりもやあるらん、巳の時はかりにそ彼の家の門には着きぬる、あるし出て迎へてまらうと居に請し入れまゐらせ、ふりはへさせ給へる畏まりを述へ、まつ果侑め參らせなとけいめいす、やかて松山へしるへし奉らんとて、さきに立ちて、しりへの門より出て丶、松山にのほる、こ丶の岩かけかしこの木の本をあさるに、茸いと多く生ひつらなれり、取る手もいとなきはかりにて、かうの殿いといたく興せさせ給ふ、しはしか程に、取れる茸はこ丶らの籠にみちぬ、かくて午の貝吹く比に成りけれは、此の山の平らきたる所に、作り設けたる假屋に請し入れ參らせ、酒物侑めて、つゐしやうす、殿もけふのおもしろく興ある事のよろこひを、かへす〻述へて、いと心地よけなるに、主人もかひありと思ふなるへし、人〻も思ふさまに飲み食ふ、殿もいたく興かりて、けふのあるしまうけのめてたき

はさるものにて、茸狩るこそいと樂しけれ、今一よりあさりてんと、いはるれは、あるし、こたひは此の奥の松山をこそとて、しるへす、こ丶には、嚮にもまさりて、茸いと多く生ひたれは、また〻いみしうおほく取りつれと、採り盡すへうもあらす、はやう日も暮れ方に成りぬれは、今は歸らんといはるれは、主人、家に請し入れて、夕饌參らす、あるしまうけ嚮にもまして、よき酒よき肴、さてはおもの丶いみしう心つくして調したるを侑む、殿も人も心ゆくまて飲み食ひて、夜に入りてそ歸り給ふ、けふ採り得たる茸を、そこはくの籠に入れ、車に積みて、かうの殿の舘を始め、供せし人〻の家〻に配り、我か宿にも二籠はかり送られぬ、あなおひた丶しの茸や、奇しきまてそ多かりける、さるは、主人はかうの殿の心を取らんとて、山守におほせて、かたう守らせ、里の童部なとにも、一つたに採らせす、おほしにおほしたるにも、猶飽かす、餘所の山より採り來て、おのつから生ひたるさまに、植ゑたりとは、後にそみそかに聞きたりし、餘りなるもてあつかひかなとなん、爪彈せられし

寒翠園の紅葉觀る記

今年十一月の半、庭の紅葉もやゝ色つきたるを見つゝあるほと、竹内の一瓢てふ人の許より文おこせつ、庭の紅葉もやう〳〵色こくなり侍れは、この廿日餘三日、午の前八つより、午の後四つまての間に、御覽しにおはせとありき、今日なんその日になりぬれは、朝の程よりと思ひしに、あやにくさはる事のいて來て、午過きて二つはかり赤坂の區、新坂町なる彼の人のかりものしつ、門を入れは右の方に谿中庵といふ庵ありつれと、紅葉見るに心いられて入りても見す、池の南の岸つたひ、石なめすゑたる細道をたとる、ゆくゆく池の向を見れは、おのつからなる山の岨をつくろひなし、木たちたて石なとえもいはぬに、こゝにうゑつらねたる楓は、けふをさかりにいろつきたる、緋金綺の軟障ひきたらんやうにて、目もあやなるに、池こしに見渡したる、ましていはんかたなし我か庭の紅葉なとは、物にもあらさりけり

小車をとゝめて見けん紅葉に引きくらふとも劣らさらまし

このなかめもあかぬものから、さすかに木の本へとも急かれて、猶池に添ひてゆけは、道のかたへに石佛たてり

寒けなる石のほとけも紅葉の錦のそてを今そ重ねん

なと獨ごちぬ、後に聞けは主人も、冷かや無緣佛の苔衣と、徘徊の片歌によまれつとか、錦の袖は中〳〵に色なくて苔の衣にゐまさらぬそ妬きや、猶池そひをめくりゆけは、水の上に構へたるさゝやかなるいほりあり、かいま見れは、疊二ひら三ひらや敷くへからん、市中隱とかきたる額かゝけたる、けに此のあたりは林しけく市の内とも見えぬ所のさまなり、此の庵より少し北に立石あり、嘉永の二年、そのをりの將軍は、家慶の君にやおはしけん、小金か原に狩せさせ給ひしをり、得たまへりし兎と鹿とを、もと爰に住めりし脇坂の中務の大輔にたひけるか、其の骨を埋みししるしの石なりとか

紅葉の色濃き見れは小男鹿も苔の下より聲たてつへし

紅葉の水影清き月の夜は兎も池の波にはしらん

そこより池の汀におり、池に石なめするゑたるを踏み渡りて、向の岸にいたり、山路を上れは、奥山の一つ家とかや名つきたる蕨屋あり、事そきたる樣、たゝ山守の住家なりけり、きぬかつきてふ芋の煮たるをくた物にかへて、茶侑む

一つ家の秋も賑はし衣かつくいもかすゝむる春の木の芽に

山を下りて、更に池のほとりにかへり、芝山のあるにのぼる、大杯てふかへてのなみたてるか、いとうるはしうもみちしたる、嶋にあなたの岸より見渡したる緋金綺の軟障はこれなりけり、近くて見るも亦こよなしや、その木蔭に酒の樽を包みし莚して笹たつ風隱を作り、地を堀りて竈とし、梻たきて釜の湯をたきらせ、かたへの木の枝にふくへを掛けたるは、樂天の唐歌のおもむき心にくし

池のおもゝ赤らむはかりかへるての大杯をさす夕日かな

あるしも、酒壺に紅葉のうつる夕日かなと例の片歌よまれたりとか、是も後にきゝたるなりけり、されと竹の葉の露よりも、もはら木の芽を煮てなんすゝめらるゝ、ふと笹たつ

物の内を見れは、思ひきや、我か友村瀨の讓か來てあらんとは、諸共に芝生にわらうだしきて、薄茶たうふ、さて芝山を下り、更に畦道をのほれは、廣坐敢といふかありて、しつらひいときよらなり、入りて見るに小床には虎溪三笑のかたを中に、山水のかたをみきりひたりに、三つの卷物かけ並へ、茶の調度ともをさへなめすゑたり、いつれも〳〵世の常の物ならす、書ける人作れる人の名を記せる文そへたり、畫は雪舟のかける、是は利休の作れるなりけり、其の外はなとそや今おもひ出てん、こゝにても薄茶ひとまりたうへて、たち出つれは、うちつゝきて、鹿の間といふかあり、こゝにもまらうとあまた居こみたれは得入らて、椽のあたりよりさしのそく、小床に掛けたる卷物には、短冊おしたり、遠くて老の目には及はす、人に聞けは、宮尾道三か書けるにて、山里を今はかきりと尋ぬれは、一方ならぬ道や惑はんといふ歌なりけり、道三とは利休かしうとなりとそ、此の庭にたてたる椅子にしりうち掛けて眺むるに、茂りあへる木の間よりゆほひかなる池の見ゆるおろかならすをかしきに、紅葉の夕日に透きて照りかゝやくいみしうなん麗しき

さらてたに下照る庭の紅葉を透きても匂ふ夕つく日かな

讓もかく

紅葉のかけこそしつけ友と見て池の緋鯉もたはれ寄るらし

つきの庭に入れは、爰は寒翠庵とそいふなる、額の文字を見て知られぬ、此の庵にも人あ
また入りをり、例のえ入らてかいま見れは、小床に壁にかけたる卷物は小堀の遠江の守
の消息にて歌さへそひたりとそ此の庵に臂折りて、またさゝやかなる庵あり、無塵洞と
いふ、例の木の芽羮る室屋なりけり、いてや此の園よ、紅葉をはさる物にて、その外の木
ともゝ愚なるやはある、たてたる石ともの姿さへをかしく、石の燈籠石の塔などみなか
いなてならぬそこよなき、今しはしも見まほしかりしかと、夕暮近くなりて人皆もあか
れゆけは、我らもかいつらねて園を出てつ

霜

朝とく起きて、新たなる氣を吸ふは、身の爲宜しかめるを、手足働かせんはましてと、思

へは、此の頭つとめて起き出てゝ、黒金の杖つきて、そゝろ歩するを、身のつとめとせ
り、今朝も例のやうに、そゝろ歩するに、杖取る手のいみしうつめたく覺えけるか、市か
谷の見附に出てしに、堀にかゝれる板橋の、白く見ゆるは、有明の月の影にやと見しは、
霜の置き渡せるになん、杖とる手の冴え氷りしも、うへなりけり、霜を履めは、堅き氷い
たるといふは、物事はたゝちに出て來る物ならす、必先其の驗の顯はるゝ物なる由の教
なり、今かう霜の降れるは、此の堀の水の、厚き氷結ふへき始なりけり、是を思へは、我か
頭の霜を載くも、代〻畑の煙、青山の露、幾程無く消え果てぬへき驗なりけり、されは、身
の爲にとて、ねふだきに、朝疾く起きて、新らしき氣を吸ひ、重きに、黒金の杖つき、寒き
に、そゝろ歩なとするは、えう無き業なから、一日片時も長らへんは、猶身のさちとおも
へはなりけり

雪

いさ給へ、雪まろはしにと、らうたき聲早りかに聞こえて、姉と思しき女の童、先にたち

て、おとうとにやあらん、ふたりみたり、うちつゝきて、雪高く降り積れる庭に、走り出てぬ、やかて雪を押轉はす程に、いと大きく成りぬるを、猶ふくつけがりて、皆力あはせて轉はすに、力及はす成りぬれは、今は是はかりにてをありなん、何物の形をか作らん、例の何かしの大師の御像作らんと、一人の言へは、それはいと微深し、靖國の社なる、大村の兵部のたいふの像にや習はん、忍か岡なる、西郷の前の大將のかたをやまねはんと言ふ程に、今年は卯の年に侍れは、兎の像作らんはいかにと、今一人の童の言へは、實に人の形作らんよりは、た安かるへしとて、とかうひきつくろひて、大きなる兎のかたに作りなし、柑子を眼にしたり、白き兎は目赤き物なれは、いとようかなへりと、皆雪に赤みて、楓の紅葉のやうなる手をうちて、悦ふめり、かゝる程に、此の女の子共のはらからにや、勇ましけなる男の童、外より歸り來て、此の兎を見て、くち惜うこそ女に先立たれけれ、よしさはれ、我はこれはかりのはかなけなる業はせし、いて大きなる山作りてん、よべての君の語らせ給ひしを承りしに、村上の帝の御時、雪のいみしう降りし日、人におほせ

て、蓬萊の山を作らせ給ひし事を始め、富士の山作りて、煙立てし事なと、物に見ねたるを、語り聞かせ給ひぬ、されと蓬萊の山はじちにある山にあらす、我等の讀めりし地理の書には見ねぬ物を、富士、新高さる山なれと、世界に類無きひまらやの山こそよからめと、友とち誘ひ來て、雪掻く料に作りたる、鋤めく物して、一庭の雪殘さす集め、餘所のをさへ運ひ來て、いと高き山のかたちに作りなし、こゝは某の峰、かしこは某の尾上、此のあたりまて、黒金の道そ敷かれたると、黒き絲曳きはへて、兒のもて遊くさに爲なる、汽車のかたを据ゑなとすめり、今は兎もむとくなり、女の子共くちをしかれと力なし、てゝなる人にや、出て來て、此のさまを見て、とり〳〵をかしくも作れるかな、女子はをみな子、をのこ子は男子にそあるや、兎いと愛しくこそ見ゆれ、ひまらやの山いとをゝし、まにとやひまらやてふ名は、雪の住ひてふこゝちなるを思へは、おのつから雪の山によしあるもをかし、それはさる物にて、此の雪の山いつまてかありなんと問ふに、皆十日餘は侍らんと答ふるに、姉なる者は一月十五日まて侍らんと言ふ、てゝなる人打ちほゝ笑み

て、さは清原のおもとにや習ふらんいと面白き物あらかひかな、其の日の來てこそ勝負は定まらめとそ

また

雪は白き物の例に引かるゝ物なれと、いと稀には、赤き雪のふる事は、人の國にも例あり、我かみかとにても、天平の十四年のむ月、道の奥の、黒川の郡より北なる十一の郡に、赤き雪降りて、三寸はかり積りしよし、續紀に見にたり、其の後もまれ〳〵には降りたりけん、いと怪しき事なれとも、其故山を尋ぬるに、雪の中にいと〳〵小さき木の子の類の生ふるにて、それをぷろとこくす、にばりすと言ふ、其の形は、物大きく見る鏡にうつして見れは、丸き玉にて、其の中に小さき核のある、それ紅の色にて、丸き玉を透きて見ゆるにこそ、これしはしか程に分れ〳〵して、いと思はすに多くなり、赤き雪と見ゆるなりと、西の國の物のことわりきはむる人の書ける書にこそ見ゆれ、赤き雪のみならす、綠の色なる雪も有り、また獨逸の國とかや、ある山の奥にて、黒き雪の降りし事さへ有りき

とそ、皆小さき菌の類、あるは虫の類の、雪の中におひ出てゝ、さる色を顯はすなりけり、今日は日くらし雪打ち垂れて降るに、外に出つる事もかなはねは、火桶掻き撫てつゝ、文机によりて續紀を讀みつゝありしに、嚮に記しゝ赤き雪の事の見にたれは、今は珍しくもあらぬ事にて、若き人には爪彈せられんとは思ふ物から、老の操言に、今は三十年餘の昔なりけり、變異辨てふ書かきて、世に奇しと思ふ事も、皆理の有りて然るよし、種〻書きつめて、摺卷にして、世に出たしつる、それか中にも、赤き雪の理なと、辨へおきたりしか、今も折〻古き書商ふ家の棚のすみなとに見にしらかふめり

雪の屋に雪見る記

明治の四十二年一月望の頃なりけり、ひと日、よへより雪うち垂れて降りけるか、つとめて起き出てゝ見るに、世は白金の界になりぬ、何處へか雪見に物せんと思ひける折しも、駿河の臺紅梅の河岸なる白井の潔水(きよみず)の許より、三人四人雪見におはし侍り、君もとくいませよと、よはれつ、さらはとて、近き頃たち縫はせたる霍鬼といふきぬ着て、手引の車

はしらせつ、白井の門に車引き入れて、おとなへは、主人出て迎へて、まらうと居に請せらる、我か着たる霍鼈を見て、あるしもまらうとも、珍しかりて、譽め罵る、霍鼈は白き繻子てふ絹してつくり、襟と袖口と、裾とには、同しき絹の黑きをつけたるなりけり、これは蒲葵堂のあるしか書きおける文に、その裁縫ふやう記せるによりて、作りしなり、晋書に王恭てふをのこか、着たりと見ねたるは、まことの鶴の羽を織りなせるよしなるか、それに准らへて、此の我か著たるやうなるをも、鶴鼈とは唱へたるなるへしなといへは、主人、とにもかくにも、雪見にはふさはしきおんよそひかな、小床の壁に掛けたる卷物を御覽せよといふに、そなたを見れは、雪は鵝毛に似て云々、人は鶴鼈を被てしか〳〵といへる樂天か句を、貫名の菘翁か書けるなり、けにこれもまた雪見の圓居にはふさはしき筆の跡にこそと、いひつゝなけしを見れは、雪の屋と、岩谷の一六か書ける額かけたり、障子には雪のけしきを、瀧の和亭そ寫したる、さはかり名たゝる繪たくみなから、筆かきりあれは、じちの眺に競へては、得まさらぬもいかゝはせん、よしや千枝常則にうつ

さしむとも、荆浩關同にかゝしむとも、けふはほと〳〵むとくなるへし、この繪も唐土の蘇子瞻てふ人の、東坡てふ所に作りたる雪堂の故事にならはれしなりけり、われそのかみ主人にあとらへられて、此の屋の記を作りたるを、今見れは、きさの牙の軸、錦の表紙の卷物に調せられたるを、まらうとたちに見せられぬ、いとしもなき言の葉を、拙き筆してさへ物したれと、かく麗しうしつらはれたれは、おのつから見所あるやうに思はるゝも、我なからをこかましや、此の記にも記せるやうに、此の高殿は西東と北の方を見はるかせは、神田、小石川、牛込、麹町、日本橋なとのちまたも唯目の前なるに、其の間になみたてる千萬の家々は、みな玉の臺と成り、市の植木もみな、玉の枝をそさしかはしたる、ましてその末に、富士の山のそゝりたてる、うるはしとも愚なり、かく麗しきけしきも、外にありてなかめをらんは、いみしう身も冴え氷りて、久しうは得あらしを、玉の板戸を透して見はるかせは、寒さも知らす、ましてすとうぶてふ物に、火燒き、炭櫃に炭おこして、すゑられたれは、さなから春のこゝちするに、あるじまうけはた暖き物調せられたれ

は、みな喜ひて物くひ酒のみつゝ、雪のけしき見渡す、まらうとの中にはから歌作るもあれは、倭歌いひ出つるもあり、醉ひしれては、時に似つかはしき唐の倭の歌聲はりあけて歌ふさへありて、ひとりか雪は鵝毛に似てしか〳〵と、歌ひ出てし時、我つと立ちあかりつ、人みな驚きて見おこせつ、かのひとりは歌ひつゝけつ、人は鶴氅を被てと、いふ時、我たちまちに躍り出てつ、白砂の袖飄してまひ奏てけれは、人みないみしう興がりつ、あなおもしろ、今日の雪見の興は、これにて事皆つきぬ、いさまからんと、ひとりのまらうとのいひ出つれは、さばとて、われも人もあかれつ

松蔭の社に詣つる記

我此の頃足の病ありて、歩ますはいよ〳〵弱くもそならんと、人もいひ、我も思へは、朝夕近きあたりをそゝろありきするに、折々は少し遠き所までも物せんとて、今日はていけもよけれは、いつこにもあれ、午の時まて行きて、さて歸り來んとて、御里をはなれて、澁谷、池尻、太子堂、三軒屋、若林なとの里々を過きてゆく程に、時計を見れは午の時なりけり、されはこゝにて晝食たうへて、歸らんと、とあるをし物賣る家に入りて、物たうふ、飯かひ取る女に、此のあたりに松蔭のやしろといふかあなる、こゝよりはさしも遠くはあらすやと問ふに、猶一里はかりもや侍らんと答ふ、こゝまて來たれは、彼の社に詣てん、さりとも暮れぬ程に家に歸り着くへしとて、大山街道といふを離れて、右の方の道を行く事十町はかり、右に臂折れて、畑中の道をたとり行けは、松蔭神社に至る、けふは此の社の祭にて、社のかたへに神樂殿を構へて、笛吹き皷打ちなとして、詣つる人影も繁くて、物賣る棚こゝかしこに見え、長門の國より出てゝ、何くれのつかさに仕ふる人々にや、假屋の中にあまたの椅子たてたるに尻うちかけて、やすらひ居たり、我は石の鳥井をくゝりて、社の前に額つく、社は二間よはう許やあるらん、稻荷なり、さて社の後の林の中に入れは、此のやしろに神といつかるゝ吉田寅次郎のを中に置きて、右には頼三樹三郎、小林民部の墓、左には來原良藏、福原元之進、綿貫次郎助の墓あり、孰れも三尺はかりの石の墓にて、石の玉垣をめくらしたり、又此の墓所をはなれて左の方に、是も石の

玉垣めくらしたる墓ありて、來原良藏妻春子と記したり、いつれも君の爲身を盡したる人々の終の住家なりけり、三樹三郎かつみなはるゝ時作れる唐歌に風雨多年苔石面、誰題日本古狂生、といへるを思ひ出てゝ、そゝろに涙催されぬ、こゝを立ちて、灣の假屋のあたりに來れは、長門人のあひ知れるか參りあひて、何くれと談ふ程に、珍かなる事をこそ聞きつれ、彼の人かたりけらく、一年のけふにそありける、いつこより來つらん穢けなる衣着たるおうな、此の社の前に立ちて、寅ぬし、寅ぬし、おことはいみしき人かなかう神といつかるゝこそいみしけれ、引きかへてわらはこそ淺間しけれ、今はしぞくの許にかゝりうとに成りて、殘りの齡を送り居るよといふに、皆人々あきれて何處の物くるひそなといふ程に、品川の彌次郎主見つけて、こは佐久間主の内君ようこそ詣て給ひつれ、いさ給へ此方へとて、此の假屋に請して、倚子すゝめなとしけるに、皆人々も佐久間象山せんじやうの内君、勝安芳主のおとうと君といふ事を知りて、二度驚きてあさみ笑ひしをおも無く鼻白みてそ見えけるとそ、世に異なる人の妻、妹とある人は、また人に異なるふるまひのあるなりけり、なと思ひつゝ、元來し道をたどりて、中さかる頃家に歸りぬ、けふは折よくも此の社の祭に出て逢ひ、世に珍かなる物語をなん聞きつる、そゝろありきも徒にはあらさりけり

新田の社に詣つる記

或年の十二月朔日頃にそありける、ていけよく暖かなりけれは、矢口の里なる新田の社に詣てんと思ひ立ちぬ、さるは我か家はそのかみ新田のぞうなりしを思へはなりけり此の日午の前八つといふに、四谷の見附より電車に乘り、所々にて乘りかへ〳〵して大森につき、車を下りて、かちより行く、入新井、池上、德持なとの里〻を經て、矢口に向ふ、池上の里過くる程、山そひに曙樓といふか見ゆ、梅多く植ゑたる園生なれと、花の時ならねは、立ちも寄らすいにし年友とちと遊ひし事を思ひ出てゝ

やとりしていつはた共になかめまし園生の梅のはるのあけほの

本門寺の前を過くるに、皷うち鳴らして、題目といふを唱ふ

鶯は春まつ山のかはらふきあなかま法の聲のたみたる

大森より德持の里までは、大方西さまに行く道なるを、千本松橋といふを渡りて、南さまに折れて、田中の道をゆけは、左の方に新に作りたる高き屋見ゆ、何そと問へは競馬見る所なりといふ、けにその高き屋をめくりて埒結ひわたしたり、こゝにくらへ馬させていみしきのり物を取り寄ふとそ

馬よりも己か幸をやくらふらん黄金白金のり物にして

今少し行けは、道のへに新田の社へのしるへの石建てたり、右に折れて行けは、松林のうちに石の鳥井あり、明和の頃、江戸に龜屋の重五郎といひし男ありて、深く此の神を信し、鳥井建て參らせんと思ひ立ちしか、得果さて身まかりけるを、志を繼く人ありて作りたてたる由、眞福寺のひしりの書けるを石にゑりて立てたり、少く行けは社ありこゝにも石の鳥居二つに、木作のをさへ並へたてたり廣前に額つきて

神よ汲めその源は遠けれと山縁尋ねて來たる心を

社の左の方に石文あり、文は服部元喬、文字は烏石葛辰の書けるにて、篆額は守山候源頼寛、延享三年三月建てたる由記せり、社の後に岡たちたる所あり、義興の朝臣の奥津城所にて彼の時沈みたる舟をさへ埋めたりといふ

昔思ふ人の心に浮ふかな塚に埋める小舟なからも

此の塚に生ひたる竹は、おひ出て、二年に成れは、かならす裂けて枯る、其の裂くる折はいみしき音すと、神つかさ語る、けに裂けて枯れたるいと多し、いかなる故にかあらん

いかつちと成りにし神に習ひてや竹もはけしき音を立つらん

彼の時朝臣と共に身失せたる伊井、世良田なと十人の屍を埋めたる所、こゝより二町はかりに在りといへは、とふらひ行きしに、新田大明神下宮とゑりたる立石あり、少し高き所にさゝやかなる社ありて、十寄大明神と記せる額かけたり、額つきてかく歌ふ

うつせみの目にこそ見えぬ今も猶宮路通ひて神やつかふる

昔はこのあたりや彼の渡りなりけん、今は多摩川の流も移りてやゝ遠くへたゝりぬ

涙こそそゝらに浮へ多摩川に沈みし人の昔思へは

十二所に遊ふ記

今日は土曜の日にて、司も午の時より暇なるに、日も長閑なれは、うま子の童伴ひて、十二所に社に詣てんとす、晝食たうへて、我か夕つゝの屋を出て、四つ谷の見附より、われきの車に乘りて、新宿にいたり、車を下りて、淀橋の里を過きて、十二所の社につきぬ、社は岡たちたる所の松林の中に在り、米精くる水車廻らさん爲、この岡を堀りて水通はす所に橋かゝれり、橋の下をのそけは、たきりて流れ行く水凄しけなり、橋のたもとに十二所の記と記せる石文たてたり、石の鳥非のあるを過きて社の前に到る、熊野の神社と記せる額懸けたり、額つきて岡を下れは、池あり横は三十間はかり、縱は五六十間はかりもやあるらん、その岸に池にのそきたる棧敷構へて、社に詣て、遊に來ん人の休らはん料にもし、酒物など望まるゝまゝに侑めん所にもせんとなりけり、梅林亭などいひて、さる物賣る家とも是彼あり、その家の後に下り行けは、の山岨を壁たつやうに切りて、瀧落す所あり、木してゑりたる龍の口よりそ迸り出つる、それ二つ並ひたり、一つは男の浴る料にし、今一つは女の浴むる料にせり、瀧の本の水の底は板敷にしたるか、疊しかは二十ひらはかりや敷くへからん、二つの瀧の間に切掛たつ物し渡して、男女の水浴る所を隔てたり、瀧の水の迸るさま、瀟く音、そゝろ寒く身の毛もいよたつやうに覺ゆれと、水無月の照りはたゝかん折なと來て、瀧の水に身を打たせたらんには、夏無き年とも思ほゆへし、此の瀧に向へる所にも大方此の瀧と同しやうなる瀧あり、是は先つ年我か來しをりまては無かりしを、近き年作りたるなるへし、また此の瀧よりも猶後に作りて、新瀧といふかは池の東の岸近きわたりに在り、そのあたりにも、物賣る家棧敷なとも、此處彼處に見ゐしらかへり、夏の比瀧浴みに來る人の多くなれる事そ知らるゝ、我等はそこかしこ見めくり、花摘みなとして、梅林亭の棧敷にのほり、勾欄たつ物に倚りて、池のおもてを見渡せは、みきりひたり岡たてる所にて、木とも生ひ重り、池の水際には松のなみ立てる、水の上に枝さし覆へるなと見所あり、前の方は晴れたれは、月の夜は一しほをかしかるへし、

女ともの茶くた物なともて出つるをたうへつゝ、歌思ふ、一つ二つ讀み出てつれと、いとしも無きえせ歌なれは記さす、童は狄といふ物を池に入れて、鯉共の浮ひ出て丶、爭ひ食ふを見て、樂しけに獨ゑみするを見れは、我さへうちほゝゑまれぬ、鯉は黑きもあり、赤きもあり、斑なるもあり、皆つふ〳〵と肥え太りたり、こゝに來る人〳〵の日毎に物與ふれは、飽きみちてかくは肥えたるなるへし、今日はていけよけれは、遊ひに來る人〳〵も少からぬか中に、寫眞の器物携へ來て、景色よき所を撰ひて寫し取らんとする人もあり、棧敷にて碁打つ人も杯廻らす人も見えしらかへり、抑此の社の始を尋ぬるに應永の比、鈴木の九郎某とかやいふをのこ、木の國の藤白てふ所より來て、中野の里に住めりしか、ひと日、下つさの國葛西の市にて、老いさらほへる馬を賣りて、一貫文のあしを得て歸るさ、淺草にて、錢を貫ける繩を解きて見れは、大觀錢といふ錢なりけり、思ひ設けぬ德つきたりけれと、思ふ旨のありて、其の錢みなから觀音ほさちに奉りて歸りしか、其の時より萬の事幸多く、幾程も無く勢猛になりけれは、人中野の長者と呼ひけるか、木の國の熊

野十二社の内、若一王子と申すを、家のあたりに社を立て丶祀りけるか、應永の十年といふに、其の社をこゝに移して、此の度は十二所の神達を合せて祀り奉りたりとそ、我か本性なる田所の家は我か故郷なる田邊の里の假庵の山本に、熊野の十二所の神を移し奉りし、熊野の別當湛增か末なれは、我はこゝに詣つる毎に、いにしへの事思はるゝに、今日しも日も夕くれに成りて、森の木村に鴉の塒爭ふを見るにも、源平兩家の戰の折、その勝負を占はんとて、別當湛增は源平の旗色になそらへて、赤き白き鷄共を集めて、社の前にて合せ見けるに、白き鷄皆うち勝ちけれは、さては源家の軍勝ちぬへしとて、源家のかたうと丶成りたりてふ故事さへ偲はれて、源平盛衰記平家物語に見ゑたる事を童に語り聞かせつゝ家路たとりつるば、明治の三十七年十月八日の黃昏なりけり

全生醫院の記　後故ありて木澤醫院と名を改めつ

かむち町のちまたに名たゝる東郷の坂の上に、四こしの高殿のそゝりたてるは、木澤の敏ぬしか作られたる全生醫院といふなりけり、をとゝしの水無月はかり事始めて、今年

の水無月はかりそ大方は作りをへられぬる、この比そのよろこひの宴せらるとて、知れる人々を請せられ、我さへその内にかそまへられけるに、くちをしう障る事のありて得物せて、一日ふた日の後ことほき聞ねかてら、院の有る樣も見まほしうて物しけるに、あるしのぬししるへして見せられけり、一こし二こし三こしと見めくるに、内の病つくらふ局、外の病つくらふ局、くすしの居る曹司、看とり女の居る曹司、藥調ふる局、藥貯ふる局は地の下にさへ作られたり、其の外何の局、くれの曹司などあまたあり、まいてやまうとやとす局數しらす多きに、今一棟二棟も建て添へんあらましなりとそ、局毎にかけられたる電鈴、曹司ことにつけられたる電燈など、のほらぬ物も無く、備はらぬ物も無し、こと〳〵くはいかてか、たゝ思びやるへし、醫師のわさ知らぬ我らたにかく思ふを、まいて此の道にいたり深からん人の爲には、これにしも限るへからし、いや果に四こしに登りつ、普賢閣と記せる額うちたり、さるは此の院作らるゝに就きて、萬まかなはれたる普賢寺の何かしか功を永く傳へんとの業なりけり、額のうら書にさる由記されたりとそ、

その外父君、せうとの君、さてはちなみある人たちのかたをかけたり、こゝを出つれは、三こしの高殿の屋の上なり、石をたゝめる樣にせめんとてふ石灰たつ物して塗り固めたり、廣さは壘百ひら許や敷くへからん、黒金のおはしまめくらしたれは危ふけも無し、軍のふねの屋形おほゆるに、司令塔たつ物ありて圭舟臺と記したり、竹内の圭舟てふ人も、この院作らるゝに就きてかにかく心つくされたるによりて、普賢閣の同し心はへに名つけられたりとそ、此の臺の高さは海のおもてよりぬき出てたる事百まり六十二さかと計られたりとそ、けに目路の界なんいといみしう廣き大宮所を始め、高き賤しき人の住ひは、棟を並へ甍を爭ひて、いろくつのいろこの如く、をと女の櫛の齒なして、たちならへる末〳〵に、國府の臺、角田川、竹芝の浦までも唯目の前なりけり、遠くは富士の根、淺間か嶽、筑波の山さへ雲につらなりて、立ちそひに、安房上總の山〳〵も海を隔てゝ眉引なせり、春は名たゝる所〳〵の花もこゝなから見渡すへく、夏は遙なる浦わの風み山おろしも涼しく吹き通ふへし、秋の月夜は庾公か高殿に登る心地やせん、冬の雪の曉は梁王の苑

覺ゆる眺なるへし、あはれ此の御里のうちにそこはくの醫院はあれと、かゝるまうけしたるはいまた聞えす、賢うも思ひよられたる哉麗しうも構へられたるかな、いてや此の院に來居らるゝ人〻は病の際に此の臺に昇り此の遠しろき景色を見はるかさは、おのつから結ほゝれし心も解けて、いたつきも疾くさわやきぬへし泉石の營肯烟霞の痼疾も此の臺の眺にはおこたりなんとそ、まことや、此の庭の植木ともはもとの聖堂にありしをうつしたりとなん、けに年經たる木ともゝ見ゐしらかふや、松の木のなれる大石を立て、をかしき石の井衍をすゑられたるかたゝならぬに、めをの鶴のうちつれて遊ふさまもいとのとけしや、みなやまうどの心をなくさむるくさはへなりけり、此の鶴は韓國の義親王のたまはせたるとそ

百草（もゝくさ）の山莊に遊ふ記

明治三十三年の十月十七日、我か華族女學校の教師かい列ねて、多摩の郡百草の里なる青木某か山莊に遊ふ、午の前八つといふに家を出てゝ、四谷の車やとりに行く、契りし人人の早う來たるもあり、猶つき〳〵に來るもありて、時なりぬれは、車に乘る、信濃町、新宿、大久保、中野、荻窪、吉祥寺、境、國分寺、立川を經て、玉川を渡り、日野の車やとりに着く、午の前十過くる頃なりけり、車を下りて百草に向ふ、しはし行けは、日野の町有り、やかて野道に出つ、都人とおほしき八人はかり、我等より先に立ちて行くなり、此の人〻も、百草の山莊にや行くらん、淺川の里を過きて、淺川あり、流いと清し、橋を渡りて行く、高幡の里に到る、寺あり、名を問へは金剛寺と答ふ、仁王門有り、堂のさまもいかめし、不動佛を祀れり、下總の成田の不動佛と同し木もて刻みたる木像なりとそ、三澤、落川の里を過きて、百草に到る、山を登る事五町むまち山莊に着きぬ、此の山莊は近き頃まて松連寺といひし寺なりけり、天平の頃、道廣てふ法師の建てたるにて、そのかみは七堂こと〳〵く具はりたりしを、新田の義貞の朝臣の、北條の軍と戰ひし時、燒き失はれたりしを、享保六年、大久保加賀守忠增か妻なりし慈岳の尼といふか再作られき、東鑑に見ゐたる眞慈悲寺といふは、此の寺の一つの名ならんといふ、さるは此の寺の本尊なりし阿

彌陀佛の像の銘によりて推し量られぬとそ、これを今の主人の買ひ得て、なり所とし、新に家を作り添へたるか、元の本堂庫裏なといひしをも繕ひて、世の常の人の家居の如くしなしたり、我等より先たちて來し人〻は、そこを借りて入り居たり、我等が借りしは新に作りたる家なり、さるは、原田稔市か先つ年八王寺の里に在りし頃、落川の里なる佐藤某といふ人とあひ知れゝは、此の山莊を借らん事をあとらへ置きつれは、便よく整ひたり、先内に入りて見るに、疊二十ひらはかりや敷くへからん、簀の子に立ちて見出たせは、廣〻とうち開けたる國原の、いく千万町とも知られぬ稻田の、黄はみ渡れるか中を、綠なる川のめくり流るゝさまは、黄なる雲間に青き龍の翔るか如し、晴れたる日は筑波山も見ゆといふ

薄墨の雲はるかせてをつくはの遠山まゆをかきも出てはや

また近く庭を見れは、池を港へ怪しく作りなしたる植木ともの間に、松尾芭蕉か俳句をゑりたる建石二所にまてあり、おのつからなる山をかく作りなしたるは、いと陋しく朽

ち惜しと打ち見るからに先思はれぬ、庭におり立ち、彼の立石のあたりを過きて、山に登れは、松林の中にさゝやかなる亭あり、其のあたりに一きは高く平らきたる處あり、清涼臺といふ、こゝより四方を見渡せは、九つの國見ゆとそ、けに廣〻と見やらる、陸軍省にて物せられたる地圖によれは、海の面より三百四十六めえとるあまりとあり、大よそ三町はかりに當れり、嚮に渡りし玉川の鐵橋、日野の里など見ゆ、富士の高根は雪白う降り積れるか、得もいはす麗し、村山の波は空の海につらなり、稻葉の雲は千里に敗きみちたり、そこよりしはし山の脊を過きて、又亭あり、こゝよりは北の方なる野山を見るへし、山を下り家にかへれは、つい重やうの物二つらになめするたり、女の人〻は左の方に、男の人〻はさし向ひてみきりの方は居並ひ、瓶子取り、杯かたふけ、つい重やうの物開くめり、其の外柿栗なとたうへて、今は腹もみちぬれは、再山に登りてこゝかしこ見ありく程に、戸村の某に逢へり、嚮に日野より來る程に、我より先にたちて來し一むれの中にありけるなりけり、遠鏡もたりしを貸さる、取りて見れは

渡り來し眞金の橋を山松の木の間にかくる遠鏡哉

さらに山莊の左の方なる八幡の社に詣つ、松杉をはしめくさ〳〵の老木とも茂りあひて、いと物深き森なりけり、社は二間よはうはかり、拜殿は前五間横は三間はかり、孰も茅を葺きたり、此社は松連寺と同しく、道廣法師の建てられたるか、源の頼義朝臣みちの國の仇共たひらけて、歸り昇られし折、御社を改め造られたるよしなり、今の社は享保の頃、松連寺作りし折なとにや作りけん、八幡の神を祀り奉るはさる物にて、神功皇后、武内の大臣、王仁、其の外の神三體はかりおはすれとも、朽ち損はれて、何の神のみかたとも見にわかれぬよし、社のかたはらに石文あり、松連寺の故由記せり、されとも苦むして讀み難し、山莊にかへりて、茶のみなとする程、もと松連寺に年久しく秘めもたりし寶物共の、今は人の物と成れるを、佐藤の某借りもて來て見す、源の義家の朝臣の矢の根といふか、長さ七寸はかり、形は鑿のやうなるか梵字をゑりぬきたり、實に年經たる物と見にたり、太刀二ふり、おほきなるは、長さ二尺五寸許、ちひさなるは一尺五寸許、鍔も添ひたり、經筒三つ、おほきなるは、長さ九寸はかり、わたり四寸はかり、唐金もて作れり、長寛元年十月十三日、たくみは藤原の守道、勸進は辨豪、結緣者は、實久、觀賢、實圓、宗阿、堯尊、辯意との銘あり、けにそのかみの人の手なるよし、坂正臣さたせらる、愛たき寶なりけり、今一つの經筒は、長さ七寸はかり、わたりは四寸には足らさるへし、勸進は堯尊にて、檀主は藤原の某、高橋の貞列と記せり、某てふ所は錆ひて讀み得ぬなりけり、永万元年九月十七日と記せり、今一つは、長さ五寸、徑三寸、銘に、云〳〵の鈞命を承りて、日本幕下を祝す、建久四年八月三日、一宮別當松連寺に納むるよし記せり、云〳〵といふ處は錆ひて讀み難し、後の二つは地に埋れし物なるへく、前の一つは、地に埋みてはあらさりけん、孰も愛たし、觀音の銅像、王仁の木像、護魔皿、古鏡、雷斧なと有りき、とかくする程に時の移れは、山莊を出て〳〵、もと來し道をたとりて、日野の車やとりに着く、時猶早し、暫ありて車に乘り入りつ、今日土屋弘か作られたる唐歌

丘山望何豁、八州歸一望、逸情雲與湧、閑興鳥同遊

野拂紅塵淨、川涵碧落流、悠然寄笑傲、領得萬峯秋

下田歌子坂正臣の主たちも必やまと歌讀まれつらん、今承りてこそ

芝の外つ宮御苑遊の記

明治の三十餘五年十一月二十日餘むゆか、山階の宮菊麿の大君、島津の忠重の君の御姉、常子の君を迎へさせられ、芝の外津宮にて、園生の竹の千代をかけたる御契を結はせ給ひぬ、御歡の宴には、宮達を始め參らせ、島津の君、宮内のおとゝ、侍從の長などよそたり許參らせ給ひぬとそ、來る日は晩餐會てふ御饗あり、續きて夜會てふ事を催され、猶廿日餘やかにも、同し宮にて園遊會てふ事をせさせ給ひ、我等も召の中に數まへられたるこそ忝けれ、其の日午の後二つはかり、外つ宮に詣て、御車寄に昇り、名つきを捧け置きて、殿の内に入る、此の殿は西の國振に作らせ給へり、此の度の御歡の御よそひとして、柱毎に青葉をもて包み、所〻に菊の花さしましへ、御車寄の壁も、一面、青葉を覆ひ、二つの鶴の向ひ合へる樣を菊の花して作られたり、殿の内には、宮、御息所並ひ立たせ給ふ、宮はふろくこうと、いふ西の國ふりの御そ奉り、御息所はぶいちんぐどれすとかや、由緣の色麗しきおんそ奉り、くゝひの羽をつゝりたる御頸かけを掛けおはさうす、まうのほれる人々つき〳〵に、御前に進みて、をかみ奉れは宮うなつかせ給ふ、御息所にも同し樣にし奉りて、殿の内を通りて、御庭におりたては、數多の人〻早うまう昇れり、知れる人も是彼見ねしらかへり、三人よたりかいつらねて御庭の内見廻る、今しも汐のさし入りて、池の心いと、豐なり、右の汀を歩み行けは、石もて造れる堤あり、中島に連れり、なからはかりの絶間に石の橋渡せり、中島には松の限おひ茂れるか、その間に石の塔立てり、塔のもとを過きて橋のあるを渡り、向の岸に到る、右に折れて行けは、岡たちたる所に赤木の柱立て、杉板もて葺ける亭あり、海にのそけり、濱の外つ宮海を隔てゝ見渡さる、月島も見ゆ、安房上總の村山も晴れたる日は見やらるへし、此の岡を下りて、池のそひを右に折れて行く、芝生あり、櫻の木多し、春ならましかは、唯白雲のおりゐる樣して、いかに麗しからまし、此の芝生の果はやかて御園の果にて、釘貫し渡したり、外の方は海なりけ

り、こゝにも岡たちたる所有り、登りて海原を見はらすへし、爰を過きて池の汀をめくれは、馬場殿あり、馬場の北の果にも岡たちたる所あり、これに登れは、御庭の内隈無く見やらる、西の國振の殿、倭ふりの殿、三つは四つはに作り磨かれたるか、池越に見ゆる、屋氣樓なといふ奇しき影かとそおほゆるに、中島の松の梢に石の塔の顯れたる、石の堤の池水に横ほれる、岡の上に亭のたてるなと、山水の寫し畫に似通へる、いはん方無し、岡を下りもと來し汀に出て、殿のおまへの庭に歸り、しはしある程に、宮、御息所西の國振の殿より出てさせ給ひ、倭ふりの殿に昇り給ふ、人〻も皆殿に昇りて、御酒物とうはる、立食てふ御餐なりけり、御肴のくさ〳〵なる、御酒さへ一くさならす、こと〳〵く書きつゝけはうたてなりぬへし、たゝおもひやるへし、我等はよき程にたうはりて殿を下り、更に御庭を見めくらんとす、さるは、しば〳〵もまうのほるへき御あたりならねは、かゝるついてに、つはらかに見奉らんとおもへはなりけり、こたひは左のかたより廻り行く、西の國ふりの殿のあたりなる藤の柳ある方を過き、池そひを南さまに進めは、橋かゝれり、御池の水口なるに、今汐のさし來る時なれは、橋の下は早川の瀨の如し、猶南さまにすゝみて、汀にそひて行けは、響の櫻の林に至る、馬場殿のうしろを通りて林の中に入れは、山と山とのはさまに橋かゝれり、其の上をも通ふへく、またその下をも通ふへし、こゝを過くれは、響に渡たりし石の堤の所に出て、殿のおまへの芝生に歸る、今は宮、御息所も内に入らせ給ひぬと承れは、我等もまかてつ

後樂園の記

後樂園は、小石川の區、砲兵工廠の中に在り、元は水戸のかうの殿の庭なりけり、今はやや荒れにたれど、大方は猶昔のまゝなり、我一日爰に遊びつれば其のある樣を記さん、抑、此の園の所は、大江戸の開かれざりし程は、遠山某がしめたる所と、吉祥寺、本妙寺てふ寺のありしを、水戸のかうの殿、賴房の卿の御館となりて、吉祥寺は駒込へ、本妙寺は丸山へ移されぬとそ、初、此の園作りしは、德大寺左兵衛てふ者にして、其の後、光圀の卿の世と成りて、諸越よりまう來つる朱舜水てふ博士に繕はしめ給ひつとなん、後樂とし

も名つきたるは、天の下の憂に先だちて憂ひ、天の下の樂に後れて樂しむてふ諸越の賢し人の言の葉をとりて、民草の上を思ふ深き心の籠れる社めでたけれ、工廠の門を入り、左に折れてゆけば、門のあるに入り、池にそひてゆくに、又門あり、こゝぞ園の入口なる、後樂園と記せる額掛れり、舜水博士の書たるなりけり、門を入れば、木立の間に、石しける道あり、左の方は溪川なり、向の岸より瀧流れおつ、寐覺の瀧とそいふ、此のあたり棕櫚の木多し、やがてすろの山といふ、そこに一際高き所のあるを白雲臺といふ

白雲の、臺の岩根、まくらきて、寐ざめ瀧の、音をきかばや

猶登りゆけば、蜈蚣山といふ、知らず、何の故に、然名つきたる、もしは、園の池を、近江の湖になぞらへ、此の山を、三上山と見なしたるにや、さるは、昔、田原の秀郷が射たりけん、奇しう大きなる蜈蚣の物語によりて、三上山を、蜈蚣山、ともいへばなりけり、こゝを下りてゆくに、立田川てふ川邊に出づ、此のあたり楓多し、されば紅葉に名たゝる彼の川波にや思もよせられけん、されど今は唯

水くゝる、唐紅の、おもかげを、色なき波に浮べてぞ見る

此のあたりより、やう〳〵うち晴れて、右の方に池見ゆ、中島のあるを蓬萊の島といふ、龜の背に負へりてふ神山に思ひよせられたるなるべし、大龜の頭と見ゆる巖のありしが、先つ年のなゐに碎けたりとぞ

龜の背に、負へる神山、松高し、おり居て遊べ天の田鶴村

立田川の上津瀨を、駐步泉とて、此の三字を鐫りたる石建てたり、齊昭の郷の御手にて、隷書てふ文字にて書かれたり、さるは此の泉のほとりに、圓位上人を祀れる庵のあれば、上人の、道の邊の、清水流るゝ、柳蔭、しばしとてこそ、立ちとまりつれ、といふ歌によれなるべし、上人の像は、小野の庄兵衛といへりし者の作りたるよし、長一尺五六寸ばかりの木像にて、上人行脚の姿なり、庵のかたへにも石建てゝ、彼の歌を鐫りたり、齊昭の郷の北の方の書き給へるなりけり、其の裏に、佐藤坦が、其の故よし記せる文をゑりたり、庵の前は、廣く平らなる處にて、櫻の木ども多し、櫻の馬場とぞいふなる

白雪と、亂るゝ花の、下陰に、月毛の駒を、誰かはせけむ

と口すさびつゝ、そこを過れば、涵徳亭といふがあり、長さ十間ばかり、廣さ五間ばかりもやあるらん、また其の右の方に、四間よはう許建てそへたる屋あり、元は硝子の茶亭と稱へたるとぞ、其のかみは、今のやうに硝子を多く用ひざりしに、此の亭の障子など硝子もて作られしは、いと珍らかなりけらし、いつの頃にかありけん、香具槌のあらびに煙となりしかば、今のは改めて作られたるなりとぞ、亭の前は芝生にて、櫻の馬場につゞけり、しだり櫻の大木あり、花の折ならましかば

久堅の、天の川との、樋口あけて、神もやおとす、水のしら波

とぞ見えなまし、芝生の左の方に流あり、大井川といふ、土橋を渡せり渡月橋といふ徳川三代の將軍此の園にいでまして、この景色を愛でさせ給ひ、京のあたりに名たゝる所の樣に思ひよそへて、しか名づけさせ給へりとぞ、大井川の向に、西湖の堤とて、長き堤をきづけるが、なからばかりに、石の橋を渡せり、舜水博士が思ひよれるなりとぞ、又大井

川の右の岸近く、三代將軍の腰掛岩といふがあり、川の左の岸にも、同じ君の御手ぬぐひ掛の松といふあり、其の松のさしも年經たりげに見えぬは、もとの木は枯れて、植ゑ改めたるなるべし、其の松の本に、大きなる石を立てたるが、木の成れる者といふ、實に、木の筋の跡さやかに見ゆ、そこより山路を登れば清水の觀音堂といふがあり、こゝはもと本妙寺のありし所にて、補陀の大士を祀りたりしを、此の園作られしをり、やがて此の堂を改め作りて、京の東山なる清水寺になぞらへたるなりけり、御佛は千手の御像ならで、唯の御姿にましませり、御堂は二間四はうばかりなるべし、梁に圓き額をかけたるが、壽の字をゑりたり、鄭成功の筆なりけり、御堂の椽の外に、大床めく所あり、清水の舞臺といふに准へたるなるべし、朱の漆して塗りたる勾欄をめぐらしたり、爰より西の方を見れば、水共の末を平かに切りたれば、目路を遮ふる物なく、都の街ひろ〳〵見はるかさる、晴れたる日は富士のねも見ゆるならん、唯蘭の老樹の立れど、高く生ひ昇りたれば、見渡しに妨なし、又南の方を見おろせば、大井川の流、涵徳亭など木の間より見ゆるも唯

ならず、爰より岩根踏む山路を下れば、通天橋といふが懸れり、これも京の東山なる東福寺のにや准へけん、長さ六間ばかり、勾欄は例の朱の漆して塗れり、此の橋を渡りて、更に山路を登り、得仁堂といふにいたる、大さは、觀音堂と同じ程なるべし、伯夷叔齊の像をすゑたり、すわれるはせうと、立てるはおとうとなりとぞ、前田の助十郎といふ者の作れるなり、此の堂は諸越ぶりにて、床は瓦をたゝめり、額は得仁堂の三字にて、源治寶書と記せり、紀のかうの殿におはさうす、爰にかゝ伯夷叔齊をしも祀られたるは、次の如き故由なりけり、光圀の卿十八の御時にや、史記の伯夷傳を讀みて、兄を超えて弟の父の跡嗣くは、人の道に背ける由を悟られて、御せうと頼重の朝臣をおきて、御世繼の君と成り給ひしを悔いおぼしつれど、御せうとの君は、早う讃岐の高松をらうぜられて、事のすでに後れにたれば、爲んすべなく、頼重の朝臣の二郎君を御とり子として、我が御跡つがせ給ひたりとぞ、綱條の卿ときこえしは、此の二郎君になんおはしける、誠にあり難き御心ばへなりけり、さはいへど異人ならば、さてもありなん、世に勝れさせ給へる君におはしながら

唐國の、などおとゝひを、慕ひけん、苑道と難波の、ためしあふがで

爰を下りて、更に山あひの道を分けゆけば、瑩門といふがあり、此の内には、もと水車をかけて、神田上水を引きあげて、大井川の水上なる小廬山と名つきたる山の峽より、瀧落したりとぞ、瀧の音は絶えて久しくなどうち誦しつゝ、過ぎゆけば川あり、橋を渡せり、石をたゝみて圓かなる形に作れり、圓月橋とぞいふ、例の舜水博士の思ひ構へて、高橋の乘てふ石の匠に作らせたるなりとぞ、此の川を渡りて、山路を登れば、八卦堂とて八角に作り構へたるあり、堂の中に、別に小き祠ありて、文昌星のかたの、銅して作れるをすゑたり、これは、光圀の卿八つの御時大御城にまうのぼられしに、將軍の君くさ〳〵の物とうでさせ給ひ、何まれ心にかなへらん得よと、おほせられしに、若君はこのかたをなん取られける、將軍の君これを見そなはして、此の童後には學の道に勝れたる賢し人となるべしと、宣はせたりとなん、山を下りて、梅林のある所にいたる、老木どもの、姿をかし

き、數しらず立ちならべり、もし春ならましかば、木々の梢は薫る雪に埋れて、鶯などかならず鳴きなんかし、草の庵のあるにたちよらまほしう思ひしかど、三人四人の男女の、入り居たりしかばさて過ぎぬ、梅の下道辿る程、道の邊に清水の湧き出づる處あり、不老の泉とぞいふ、梅の林の界に川あり、壁二ひらしくばかりの石を橋とせり、それを渡れば田端の水田といふ所あり、光圓の卿の深き御心ばへにて、北の方を始めまゐらせ、おもとたちにも、民共のいたつきを知らしめんとおぼして、此の水田をはらせ、北の方におほせて、田作る業をつかさどらせ給ひたりとぞ今は杜若をなん植ゑられたる、水田の南は廣く平らぎたる所にて、松多く生ひたてり、七代の將軍にやおはしけん、此の松原の景色を痛う愛でさせ給ひつとぞ、爰にも草の庵あり、中に机をすゑて、其のめぐりに、あぐらだつ物たて並べたり、某の亭などやいふらん、得問ひきかで過ぎつ、此の松原を南ざまに池に添ひてゆけば、蓬萊の島に向へる岸に、大きやかなる石の燈籠すゑたり、火ともす所、三尺四はうばかり、いと珍らかなる形なりけり、猶進みゆけば瘞鶴の碑といふたてり、こ

れは齊昭の卿の御父君、將軍より鷹を賜はりて、飼ひならし給ひしに、父君のかくれさせ給ひし日、其の鷹も死にたりければ、これを野べにすつるをいとほしうおぼして、此の園に埋めさせ給ひし由御自の御手して記させ給へり、爰は此の園の南のはてなれば、もと來し道を過ぎて、再、松林の所に歸り、左に折れて、池ぞひの道をたどりて、白糸の瀧といふが本に至る、瀧の高さは二間ばかり、はゞは一間に餘るべし、屏風を立てたらんが如き岩のおもてを、走り下るさま、實に千筋八千筋の白糸を、操りかけたらんが如し、瀧の末は谷川となりて池に入る、川には石を並べて、踏み渡るべくしたり、これを渡りて、平らぎたる所に至る、爰にも草の庵あり、唯しりうちかけて休らはん料のあぐらたつ物すゑたり、此の庵の前に當りて池にさし出でたる所に、辛崎の松とて、水の上に枝さしおほへる松あり、元は大きなる松のありしが枯れければ、改めて植ゑられたりとぞ、爰を辛崎になぞらへたらんには、池の向に見ゆる蜆蛤山といへるは、三上山と見なしけん事、いよ〳〵しるし、此の松のあたりを過ぎて、入江に長き石をかけ渡して、橋とせるを渡りて、

櫻の馬場に歸りぬ、今は園の中殘る隈なく見廻りをへつ、さて此の園のすべてに就きて言はゞ、池の心ゆほびかに、木だち物深く、石を立て、水走らせなど、いひしらぬ趣あり、誠に世に稀なる園なりけり、まいて得仁堂、駐歩泉などの故由ある、龍田川、西湖の堤など、唐大和の名たゝる所のさまを思はれたるうち見る景色の外に、いみじき心の籠りてぞ見ゆる、德大寺の某はいみじき庭作のたくみなりけんを、舜水のはかせの思ひはかりも、唯ならさりけらし、光圀の卿の世に勝れ給へる御心ばへもて物せられたるはさる物にて、齊昭の鄕のつくろはせ給へる跡さへ見えて、をかしともをかしくこそ、齊昭の卿の作らせ給へる水戸の園生を偕樂と名つけたるも、此の園の名たぐひにおぼしよらせ給へるなるべしと思ふをいづれも民草の上にかけ給へる恵の露の光見えて、かたじけなき御心ばへを偲び參らするにつけても、水戸なる園生のおもかげさへ、此の池の水鏡にうつろひて

いぎりすとすぺえんとの戰　英文の譯

いえすくらいすとのあれ出てしより、千五百八十八年の後なりけり、いぎりすの國とすぺえんの國といみしき戰ありけり、抑此の戰の起りしは、ほうらんどの國とすぺえんの國とかたみに仇敵なりしを、いぎりすの國はほうらんどを助けて、すぺえんの知る所を攻め擊ちけれは、すぺえんの大君ひりッぷ、痛く憤りおほし、法の道の爭さへありて、かた〳〵いぎりすの國亡さんとおほしたちて、船軍を習はせ、軍の備に心を盡されしか、今し設と、のほりしかは、まつ軍をりすぼんの港まて出されつ、大船小船併せて百三十六、大筒の數三千百六十五、兵は二萬二千、水手の數は八千人とそきこえし、當時かはかりの軍は天の下にまた有らさりけり、されはすぺえんの國人は、かゝる勢もて攻め擊たんには、さゝやかなるいぎりすの國は、たはやすく打ち亡すへしと思ひあかりて、みつから仇無き軍とそ誇りける、いぎりすの國には軍の船は僅か三十四、すへて國の中の水手共を集めても、一万四千に過ぎさりけり、さはいへと國人は露畏るゝ景色も無く、皆起り立ちて戰はんとし、やんこと無き人〻は、私に軍の船を設けゝれは、軍の船も兵も

おほせし數を二つ合せたるはかり多かりけり、此の時のいぎりすの大君は、御名をえりざべすと申して、女におはしゝかと、いみしう雄〻しうまし〳〵て御自船軍をおきて給ひ、はわあどてふ人を船軍の君として、どれえき、ほうすきんす、ふろひッしや、られえなとの人〻をして助けしめ給ひき、此の人〻は當時萬の國に知られたる物部なりけり、大君は又陸の軍をも三手に分ち、一手は二萬人、南の海邊を守らしめ、一手は三萬人、てえむすの川邊に陣を張らせて都の守とし、今一手は三萬人、大君御自率ゐさせ給ひぬ、かくて大君はてえむすの川邊なる軍のいほりに出てまして、我は女の身なれとも、此國のあるしにしあれは、居なから此の國の亡ふるを見て、恥を後の世に殘さんよりは、屍を軍のにはに曝しなん、汝等も亦國の爲に、身を捨てゝ仇を防け、我は汝等に先かけて戰はんと宣ひける、これを承りたる軍人は更にもいはす、國こそりて勇み立ちぬ、其の年五月二十五日すぺえんの軍船は、りすぼんの湊を出てゝ、いぎりすに向ひて進みしに、ひにすてりーの岬にて、あからしま風に遇ひて、そこはくの船を損ひ、七月十九日にそ、りざあどの岬には着きにける、いぎりすの軍の君はわあどは、これを聞きて、ほうすもうすの港を出てゝ、同しき二十一日の朝またき、出て迎へて戰ひぬ、いぎりすの船は僅に六十七、しかもすぺえんの船に競へてはちひさかりき、其の時はわあど聲振り立てゝ、彼か船はおほきなり、我か船はちひさなり、妄に進みてあやまちすな、唯船を控へて、仇の隙を待てとそ叫ひける、かゝる程に、此處の湊彼處の浦わに集れりし私の軍の船共皷の音を聞きつけて、我劣らしときそひ出てゝ、公の軍船に加りぬ、二方の船三百はかり、彼方此方に打ちつらゝきて、海は船ならぬ方も無し、すぺえんの軍の君めしなの君は船軍に馴れぬか上、船は餘におほきくして、進むも退くも心のまゝならす、玉打ち出たす船窓の高くして、玉は徒に空に飛ひ、かたきの船には中る事稀なりけり、はわあどは之を見ていさやかかれと叫ひもあへぬは、待ち設けたるいぎりすの兵共、疾き風の如くに進み寄りて戰ひけれは、仇の軍は忽亂れて、勝れておほさなる二つの船の有りしか、一つは自火を出たし、一つは帆柱打ち折られて、二つなからどれえきか爲に奪ひ取られぬ、さしも仇無き軍

と誇りたるすぺえんの軍船もはかなく打ち負けゝれは、此の時二萬三千の兵を率ゐて、ふらんどるすに在りしばるまの君を船に迎へ入れて、てえむす川を溯り、ろんどんに攻め入らんとて、どんきるくに向ひて進み行き、同しき月の二十七日、かれいの海に碇おろしつるに、いぎりすの船跡を追ひ來て、仇み方の船あひへたゝる事僅に二里はかり、其の夜はわあどは松のやにを八つの船に積み入れ、忍ひてすぺえんの船に近つき、松のやに火を付けて放ちかけしに、仇の船に燃ゑ移りぬ、仇はいみしうあわて騷きて、碇を擧る暇も無く、纜切りて逃けのきぬ、いぎりす人は追ひすかひて、又船十二を奪ひ取りぬ、すぺゑんの船軍はこゝに再打ち負けて、いと痛うおち恐れて、ばるまの君も進みて戰はんの心も失せ、めしなの君も力なくして今は遁れ歸らんと謀りけれと、西南の風烈しくして、いぎりすの迫戸を出つる事かなはねは、すこッとらんどをめくりて歸らんと、同しき二十九日北に向ひて船を遣りしに、せるまんの沖にて又しも荒き風に遇ひて、さしもいみしき大船もわた中に漂ひて、散〻に成り、すこッとらんどの海に漂ひ着く者三十はかり、多くは荒波に打ち碎かれて、底の藻屑と成りけれは、すぺゑんに還りし船は僅に三つか一つに過ぎさりけり

この文書きしは、ろしやの騷の折なりけり、我か軍人にはわあど、どれゑきにも劣らぬもの〻ふ少からねは、仇の軍も彼の仇無き軍の如く、亡ひ失せなん物そと、思ひしに、あのごと竹島わたりの戰に、ほと〻水泡ときゑ失せけるこそ心地よけれ

くえびッくの戰　英文の譯

耶蘇基督のあれ出てしより、千七百五十九年後の事なりけり、いぎりすの軍はふらんすのらうせる北あめりかのかなだの國を攻め取らんと、軍を三手に分ちて、一手はおんたりおの湖を下りて、もんとりいるを取り、一手はちやんぷれいんの湖より進みて、ちこんてらこを取り、今一手はうるふてふ軍の君八千餘の兵を率て、しんとろうれんすの川を登り三手の軍くえびッくにて出て逢はんのあらましなりしか、うるふの軍のみは七月二十七日に早うくゑびッくに着きしかと、二手の軍はいかなる障か出て來にけん、出て逢

はさりけり、抑くえびッくの砦は、川水の面より高き事二百尺はかりの岩山にて、後にはあぶらはむの山あり、いみしう高くはあらねとも、いと嶮しくかたきを防くにはいみしう便よき所なれは、あめりかのちぶらるたあとそ稱へける、今ふらんすの軍の君もんとかあむといふもの〳〵ふ一萬のつはものを率て、堅くこれを守りたり、うるふはみ方の軍の出て會ふを待ちけれとも、見えさりけれは、我か一手の兵もて攻め打ちけれと、もんとかあむよく防きて、たやすく攻めとる事のかなはねは、うるふはこ〳〵にたはかりけらく、かたきの思ひかけぬ程に、襲ひうちてこそうち勝ため、敵は所〻持ち分けてこそ守るらめ、こ〳〵を守る兵は僅に三千六百にはこえしとて、九月十三日の夜の闇の紛に、忍ひて川を溯り、子の時過くる比にこそあぶらはむの山本には着きにけれ、うるふは直に岸に登れは、兵共もあとに續きて、木の根に取り付き、岩角に縋りて、夜のほの〳〵と明くる比、山の頂には登り着きぬ、かたきはかくとも知らさりしか、夜明けて始めてこれを知り、俄に兵を整へて馳せ向へと、うるふは玉を擊たしめす、なりを靜めて控へ居しか、敵の玉にたゝむきを打たれぬ、うるふはみつから疵を包み、猶も控へて居たりしか、敵はいよ〳〵進み來て、今はそのあはひ幾何もあらさりき、此の時うるふは、打てやと叫ひぬ、いきりすの兵はひとしく玉を打ち放ちぬ、ふらんすの軍色めきぬ、うるふは先に進み出て、み方を勵まし馳せ廻りぬ、再敵の玉に中り腰のあたりに手を負ひぬ、されともうるふは事ともせす、ます〳〵振ひ戰ひしか、また〳〵胸を打ち拔かれぬ、さすかに得堪へて倒れしを、陣のあとへに昇きもて行き、痛手をつくろひ居たりしに、逃く逃くと叫ふ聲程遠からす聞えけり、うるふは人の肩にか〳〵りて、うな垂れたりし頭をもたけて、逃るはかたきかみ方かと問ひぬ、逃るはふらんす、み方は勝ちぬ、此の答をき〳〵て、うるふはうちゑみぬ、あはれ我か死も幸ありけりといひも果てねははかなく成りぬ、もんとかあむも痛手をおひぬ、くすしを呼ひて問ひけらく、我か命いつまてか保つへき、明日まてはえおはせし、もんとかあむはうち笑みて、あはれ此の砦の人の手に渡らぬ程に、我か命の失せなん事こそ幸なりけれといひつるか、來る日の明方にそ、ふらんすの兵共はこと〳〵くいぎり

すの軍に降りつる、この戰にいぎりすさまに死にもし手負ひもせし兵六百人、ふらんすさまにはこれよりも猶多かりけり、俘虜と成りしは千人許とそ聞ゐし、かくて來る年の春になりて、かなたの國はみながらいぎりすのらうする所とそ成りにける、後にいぎりす人はこゝに石文たてゝ、うるふとゝんとかあむとの名をゑりて二人の魂を祭りぬとそ

韓愈于襄陽に送りし書の譯

文月の三日、某のはかせ愈、かしこかれとおとゝの君のおん許に聞ゐ奉る、ざゐ高くぬき出てゝ、名を今の世に顯すは、司位はやう進みて、天の下の覺ゐめてたき人先に立ちて引けはなりけり、功廣くかゝやきて德を後の世に傳ふるは、司位新に進みて、天の下の覺ゐめてたき人しりへに立ちて助くれはなりけり、よしやざゐかしこくとも、引く人なくは、其の名世に顯れし、よしや位高くとも、助くる人なくは、其の德世に傳らし、されは、ひく人ひかるゝ人、助くる人助けらるゝ人、始よりあひよらではかなはぬ業なるを、あひ逢ふ事の千世に稀なるは、上なる人ひくへき者無く、下なる者助くへき人無きにやあらん、いかてあひ求むる事のせちにして、あひ逢ふ事のうとかるらん、さるは下なる者己かざゐを頼みて、上に諂はす、上なる人我か位に誇りて、下をかへり見ねはなるへし、さゐかしこくて身は沈み、位高くして功顯れぬは、上なる人、下なる人、共に思ひ誤れるなりけり、求めすして上に助くへき人無しとはいかてかいはん、尋ねすして下にひくへき者無しとはいかてかいはん、是やつかれか久しく唱ふる言卿に侍り、然れともいまた人に語りたる事なん侍らさりし、畏かれと殿は世に類無き御才おはしまして、萬ひとつみ心にとりまかなはせ給ひ、道正しく、業まめやかに、おんふるまひ世のひとしなみにおはせす、文の道によりて國を治め、兵の力もて世をなひかせ給はん事も、唯み心のまゝとそ承り侍る、上なる人の助くへしと申しつるにそあたらせおはします、さは申せとも賢しきをひきて、ゐやまひ用ひさせ給ふとも承らぬは、求めさせ給へとも、させる賢し人の侍らぬにや、ひたすらおん功を立て給はんの御心深く、はたおほやけに報い聞ゐんとのみおほして、さるへき人にあはせ給ひなからも、ゐやまひ用ひさせ給はん御暇たにおはせぬにや、

疾くも其の事の承るへきに、久しく承らぬこそ怪しけれ、やつかれかどなき身には侍れと、猶世の人なみには後れ侍らしと我みつからはおもうたまへさたむるを、求めさせ給ふ人得給はすとならは、願はくは先やつかれより用ひさせ給へ、古の人もさこそは申し侍りつれ、今やつかれか身のまどしさよ、寵の煙賑しからす、やつこ雇はんあしたに乏しう侍るを、唯一度殿のみあへと丶めさせ給は丶餘ありぬへし、然はあれと、まろは功を立つるに志深く、はたおほやけに報い奉らん事にのみ心のいらるれは、よしや賢し人に逢ふとも、ゐやまひ用ふるに暇もなしと宣は丶、とかう申すへき言の葉も侍らすかし、世に胸狹き人はいふかひ無し、心廣き人たにもやつかれか心汲み知り給はすは、まことにすくせの拙きなりけり、昔作り侍りし文十まり八種、かしこけれとおんもとにさ丶けたいまつる、御らんせさせ給は丶、やつかれか心の程酌み知らせ給ふやうもおはしまさまし、あなかしこや

韓愈張籍に代りて、李浙東にさ丶けし書のうつし

某の月、某の日、前の某のつかさ、籍、謹みて東に向ひ、額突きて、浙東の觀察使中丞李の君の御許に聞えあけたいまつる、籍承るに、世の人をさたする者みな申さく、今の世に在りて、古の方伯連帥などやうの司承り、天の下の一方に居て、我か知る國〻の限を、心のまゝにまつりこつ人〻の中に、唯殿のみなん御心曇無くおはして、ひとしなみの方〻に勝れさせおはしますとなん申しあへる、此の御事はかたく籍か胸にこめて之忘れ侍らぬなり、此の頃殿の司人李協律翔都に登られぬ、此の人籍か友にて、六年七年逢ひ見さりしに、登り來つと承りて、馳せ行きて逢ひ侍りき、恙無しやと問ふより外に一言たにいひ出つる暇も無く、やかてよき主もたるをなん悅ひ聞ゑ侍りしに、李翔ぬしいはく、そこは我か主の御事をこと〳〵く窺ひ知り給ひなんや、己今つはらかに聞ゑ侍らんとて、うち談ふ程に、籍かまだ承らぬ御事を承り、心の中みそかに悅ひ侍りき、さるは、今の世にはいにしへ人の如く勝れて賢しき人は夢にあらしとのみ思うたまへ捨てつるを、今おもはすに、さる君のおはしつれはなりけり、然はあれと、退きてかうかへ侍れは、またいみしう

悲しかりけり、我はかう幸無くして二つの目物見る事叶はす、身は天の下にたう無き物と成り侍り、胸はおもひはかりに富めれとも、家はまとしくして一足歩む事たにかなはす、まいて御あたりは千里の外にへたゝれゝは、いかては御かたへにまうのほりて、一度口を開きて、胸の中の思ひはかりを泄らし聞ゆへきと、涙に咽ひて物もいはれ侍らさりしに、みつから心を勵ましていはく、能無き者こそ目しひては世に捨られ侍らめ、能あらん者はよしや目はしひぬとも、なみ〳〵の人にこそ捨てられめ、古の道おこなはん人には捨られ侍らし、浙水の東三つの國、家はちよろつ、目しひさる人限も侍らし、しかも殿の人を撰はせ給ふは、ろ無う賢し愚なるを見給ふへし、目しひたること、さらぬにはよらせ給ふまし、世の人はなへて心なん暗き、藉は唯目こそ暗けれ、心はよく物のよしあしを辨へ侍るへし、もしお前に召されて問はせ給ふ御事おはせましかは、口はろなう物申すに妨侍らす、幸にまたなからへ侍れは、一度心の中に秘めおける思の程を聞にあけ奉らんとなん思う給ふる、願はくは、藉の能有る事を疑はせ給はす、御あたりに召しあけ給はら

はや、藉又古の詩を謠ひ侍り、世渡る道に心安からしめ給はゝ、徒然におはせん折、一度おまし所にめされて謠はしめ給へ、おんおしまつきによりて聞かせ給はゝ、笛の聲琴の調くさ〳〵の物の音にも勝るやうも侍りなまし、目しひたる者は心ひたふるにして、業かならす精し、されは歌人はみな目しひなりけり、藉も亦此の輩に類へつへうもや侍らん、妻子を養ひて、飢ゑしめす、凍にしめす、藥求むるにあしゑしう侍らすは、目の疾はさしもいみしう侍らねは、再天地月日を見る事もかなひて、世のすたれ人と成り果て侍らし、さ侍らんには今より死なんまての齡は、みな殿の賜物にこそ、ほと〳〵絶なん玉の緒を繋き、早うしひたる目を開かせ給はらは、こよなかるへき御德をいかにしてかは報い聞に奉らん、いかて〳〵、此の心をおし量らせ給へかし、いと恥かゝやかしく額突きて申す

韓愈科目といふ試にあたりし時司人に送りし書のうつし

某の月某の日、愈謹みて聞に侍り、渡つ海のほとり、大江の水際、いと怪しき物こそ侍れ、

世の常のいろくつ貝つ物の類には有らさりけり、水に逢はゝ雨風を起し、天に昇り地に降るも唯心のまゝにこ侍りなん、然れとも水に及はぬ事僅に一丈一さかはかり、高き山大なる岡を隔て、廣き野深き谷をへたてたるに侍らされと、我と我か身を水に入るゝ事のかなひ侍らねは、河うそに笑はるゝ者十か九つに侍り、もし力有る者彼か苦しむを見てあはれと思ひ、水有る處に移し得させんとならは、唯一手、一足をつかふのみにして助け侍るへし、さは申せとも彼の物は己異なる勢有るを頼みて、よしや其の身は砂子の上、ひちりこの中に消ぬとも、我はさらに悔いおもはし、頭をさけ、耳を垂れ、尾を搖して、人の助を乞はん事は我かほいにはあらすといへり、されは力ある者こゝに來あひて、つら〳〵これを見侍れとも、知らぬ顔作りて行き過き侍りき、さては彼の物の生死は知られさりけり、かゝる程に、力有る者又來逢ひ侍りぬれは、彼の物こゝろ見に、頭を仰きて、泣き叫ひ侍りき、力有る者は彼か苦しみを憐みて、爰に一手一足のいたつきを忘れて、彼を白波の中に押し入れ侍り、かう憐むもすくせに侍り、彼の憐まさりしも宿世に侍り、又

すくせと知りて泣き叫ひしもすゝせに侍り、此の有るやうたゝやつかれか今の身の上に侍り、いかて〳〵此の物語を御覽せさせて、やつかれか心を推し量らせ給へとよ、かしこ

友垣集のはし文

我か友、松井通昭ぬしか物せられたる此の友垣集よ、君か先達とし、友とちとして、親しみ交らひし人〻の歌共を集められたるなりけり、さるは、教を受けし恵をも忘れし、むつひ合ひしなさけをも深めんと、年ころおもひかまへられて、おほやけのつとめのひまひまに、とかういたつかれて、かう一とちとはなされつとそ、あはれ、色こき君の心の花の、人〻の言の葉と匂ひあへるこの垣内よ、誰かは麗しと眺めさらん、何人かはめたしとおもはさらん、今より後も、友垣のあまたに成りまさらは、また〳〵もかゝる集を物せらるゝなるへし、この友垣の中にも、はやう無き數に入れる人〻も見ゆるに、このゝち物せられん歌卷には、我らか言の葉も、なき人の形見として、摘み入れらるへしなと、無がら ん後をさへかけて嬉しうおもはるゝまゝ、一言かくなん、見ん人老のたはことゝな笑ひ

そよ、明治の四十あまり二年の五月はかり、なゝそち三つの老人鳥山のひらく

桃の舍歌集のはし書

桃の舍、寺澤元章のをちは、我か木の國、和歌山の郷にすまはれ、我は同し國なから牟婁の田邊の里人にて、後に和歌山の郷にうつりしかと、をちかはやうかくり世にまかられし後にて、現世にては得逢はてやみにしこそくちをしけれ、をちは御國學に志深く、本居の大平の大人の敎子となり、また平田の篤胤の大人にも、名つきさゝけて、敎を受け、深く神の道をたふとみ、いそしみ學はれしをは、さる物にて、歌をさへ好みてよまれにけり、こたひ嫁の君、ふさ野刀自、その歌共をすり卷に物せらるとて、その下書をおこせて、寫しひかめもそ侍らん、詠みあやまてるもそ侍らん、改め正し給へ、かつ神のみ仕業のあやしくくしひにして、大かたの世人の傾きおもはんたくひの歌は、姑く除きてよと、我か友桂木ぬしゝてあとらへられぬ、けに世のつねの人の辨へ知らさらん事を、世にいたすとも、目しひともしらて天狗木靈などの、手を盡して、くさ〳〵の姿を顯し、驚かさんとするたくひにて、いとをこなる業なりけり、さてその歌卷をくりかへし見もてゆくまに、削るへきは削り、筆加ふへきは筆加へて、返しけれは、さらにはし書をもとこはるるまゝ、只一言かくは記しつるを、をちはかくり世よりかいまみて、うちうなつられんや、あらすや

黃

春來しをりは、鈴菜の咲きつゝきて、黃なるかも敷きわたしたらんやうなりし畑も、今は黃はめる稻葉の雲の末遠くそたなひける、その中道をわけゆけは、寺あり、黃蘗山のすちなるらん、彼の寺めきて、門にも堂にも、聯といふ物かけだるか、文字をゑりて、こかねの箔おしたり、庭に大きなるいてふの老樹ありて、そゝりたてるか、此の頃の時雨に色つける、いと美し、堂のうちをさしのそけは、御佛はさらなり、みつしや何や、皆黃金の光きらきらしきに、眞鍮てふ金して作れる花瓶一つかひに、黃菊あまたさしたるか、口無の衣きたる法の師の、染紙を操り廣けて、讀み居たる、貴くなん見えし

黒

硯は赤き石しても作り、青き白き石しても作れと、大かたは黒き石してそ作るなる、それにてする墨なん黒き物の限なる、墨を作るには松の木をたきて取れる煤に、牛の皮を煎て作りやかて煎皮といふ者をましへてねり、型に入れて、丸にもけたにも形を作り、乾したる物なる事は、誰もき丶知りてそあるらん、大かたの墨は、松の煤なるを、よき墨は胡麻の實をしほり取れる油に、火ともして、その煤をとりて作るなり、それは松の煤よりも細かなるか故なり、墨のよしやあしやを試るには、くさ〳〵の業はあれと、次のやうにするかよきよしなり、黒き漆してぬれる板に、墨をつけて日の光にあて丶見れは、わろものはしらけて見ね、よき物は漆の色とことならすと、米庵墨談てふ書に記したり

長庚舍歌文集二編終

明治四十三年一月一日印刷
明治四十三年一月三日發行

著作兼發行者　鳥山啓　東京市麹町區下六番町四十八番地

印刷者　松澤江三　東京市麹町區下六番町十七番地

印刷所　同勞舍活版所　東京市麹町區下六番町十七番地

8 P
315.

88
315